

『研究紀要』通巻二十一号

一九七四年五月（能力開発工学センター）

創造する心の形成

—『職人衆昔ばなし』より—

矢口
新

も
く
じ

1	はじめに	3
2	職人衆と仕事	4
3	身体でおぼえることのきびしさ	7
4	構えを身につける	10
5	心の構えをつくる	13
	道具に対する心構え	14
	職人心をつくる場	17
6	主体性の形成—やる気	18
	仕事好き—働く意欲の基盤	19
	主体性を育てるもの	23
7	職人生活の形成—仕事三昧	25
8	職人の生甲斐	29
9	心の豊かさ—核のある生活	33
10	無限の前進—文化を生む心	38

はしがり

心の形成の問題は最近急激に重視され出して来た。心の形成については、近代教育は極めて貧困である。それは修身教育の枠を出ることができないでいる。しかも現代の中高年令の人々はそれにノスタルジアをもっている。修身教育が学校からなくなったことが、現代の人心の悪化を来たしているという錯覚をもっていて、その復活を要望する人が多い。

修身教育がまがりなりにも効果を發揮したのは、実は明治時代の家の生活、社会の風習慣行、或は道徳といわれるものの実体が人間を形成していたからである。それは生活の中で人間を実践的につくりあげる役割を果たしたのである。それがあから、修身の言葉も役に立ったのである。

現代の人々は、生活の実体の中で人間をつくることを忘れている。教えるものがまず己を正さなくては、人を育てることができないということを忘れている。社会の指導者がそういう点で悪い範をたれていることをもつと反省しなくてはならない。家の中も同じである。更には人々は人間の心がどうあらねばならぬということは語るが、いかにしてそうあらしめるかを語ることがない。それは言葉で要求すればできているからかもしれない。要するに修身的説教方式しか方法

はないのである。生活が心を形成する、行動が心を形成することを根本から認識し直さねばならぬのではないか。

当センターでは、行動による教育を基本にしてさまざまな教育システムを開発して来たが、その根底には常に心の形成の問題を置いている。そういう点から具体の人間像がいかにして心を形成して来たかを探究して来た。今回それを三冊の研究資料として参考に供することにした。その第一冊がこの職人の心の形成を問題にしたものである。この研究資料が、学校や企業内教育での心の形成の具体的なあり方を構想するのに何等かの参考となれば幸甚である。

最後にこの研究は、ひとえに斉藤隆介氏の著書『職人衆昔ばなし』によっている。この研究資料はその教育学的解説とも言うべきものにはすぎない。若しこの資料を読まれて意義ありとされるなら、それはすべて斉藤氏のものである。その点で原典に当って更に多くの示唆を読みとれることをおすすめる。斉藤隆介氏に厚く感謝をささげる次第である。この研究資料の執筆は所長矢口新が是に当った。

昭和四十九年四月二十五日

1 はじめに

人間の教育を研究する者として最近のような社会の腐敗墮落を見せられるのはやり切れない気がする。どうしてそうなのかは、長い間私の頭の中でもややもやしていた一番大きな問題であった。そうしてそれは、近代教育そのものの基本的な性格に根ざしているのではないかと考えるようになったのは、ここ十年位であろうか。近代教育の発展はめざましいものがあると学生時代から教えられて来た者にとつて、それが同時に欠陥品だという認識はやりきれない気持ちである。近代教育は量の上で確かに偉大な成果をあげ、それをもとにして日本の現代の物質的繁栄が得られたけれども、同時にそれが人間を見失わせていることも確かだと思う。しかしこのことは人々に必ずしも明確になっているわけではない。むしろ人々は、現代教育のさまざまな問題点を感じながらも、その根本的な方向は是認しているようである。

私は、近代教育の知識注入主義は徹底的に排撃されるべきものと思っている。そして、それに代わって行動主義の考え方を樹立しなければならぬと思っている。それはまだこれからのわれわれの仕事であるが、人間は単に理性をもつ存在だなどという見方でなく、行動によって人間になって行くというように考え直さなくてはならぬと思う。われわれはわかることを中心に物を考えるような習性をもたされているが、わかるでなく、何か

できるでなくてはならぬ。できるということを中心に人間を見直す必要があると思う。知識というのわかるものという見方で見るのではなく、自ら知識をつくることができるという考え方でとらえる必要があると思う。これはおそらく教育の姿を根本的に変えることになる。何十年かかる仕事なのであろう。私の生きているうちにそういう姿に変わることは到底望めないけれども、人類はそういう考え方で人間をつくることを考えなければ、おそらくやつて行けなくなるのではないかとさえ思っている。

最近の私の仕事は、一つにはそういう考え方で教育の中のある部分を具体的につくり直すことをやることと、もう一つは歴史の中でそういう行動主義の考え方で人間の成長を考えて来た思想をさがすことである。

ここに紹介するのは、そういう仕事をしつつある時、たまたま斉藤隆介さんがものされた『職人衆昔ばなし』『同 続編』の二冊が私に大きな感動を与えてくれたからである。これは大変立派な著作である。この書を読んだ頃、私は道元や親鸞などを讀んだり、家訓を讀んだり、西鶴を讀んだりしていたが、それらの古典とおなじ程の迫力をもって私に迫って来た。それで、丁度道元や西鶴を分析すると同じ気持ちで、この斉藤さんの著作の解説を試みたのである。斉藤さんにはまだお断りしていないが、この論説が出来上ったら御送りして御許しを得たいと思っている。

この論説は、職人衆の心を、教育という見地から私なりの解釈をしてみたものである。どうしてそういう心をもつようになったかということ、私のもつ行動の学習観から解釈してみたものである。そして私なりに、人間の教育は行動的な考え方でなされねばならぬと益々強く思うようになった。それは職人衆の言葉を借りていえば、仕事によって人間をつくる

ということなのである。そういうものがなくて、おしやべりを聞かせて人を教育するなどということは意味がないということである。しかし現代の教育は大部分がそのおしやべりなのである。これでは人間はよくなる筈がないではないか。

そういう点をこの論説からくみとって、同感されるなら、是非昔ばなしに直接ふれていただきたいと思う。

2 職人衆と仕事

職人根性・職人氣質(かたぎ)などというのはよくも悪くも使われるが、よく使われる場合でも概してそれは当世風ではないと考えられている。現代の時勢に合わない了一般に言われているようである。

一口に言うのはむづかしいが例をあげよう。職人氣質の特色の一つに「仕事に全力をつくす」ということがあるのではなからうか。

大工さんの例だが『家は一生のもの、坪十万の普請ふしんでも上の空の仕事じゃ駄目。職人の魂をこめて仕上げる』ってのが親方の口癖だったね…』と木所仙太郎さんは親方のことを述懐する。(29ページ)

また「手を抜くな、手を抜けば雨が漏るぞ、風で飛ぶぞ」これは屋根屋

の新井茂作さんの処世訓。(126ページ)

また次のようなものもこの例に入るであろう。

「大体がいまの細工は機械作りで横着おうちやくになってるよ。昔はこんな薄いものでも一厘厚い二厘厚いと客からこまかい文句が来たもんだ。

アキも五分低いとか高いとか、もう一枚あげたら良い格好になるのならねえの、客からも親方からも文句が出たもんだが、いまは木に習って仕事をするになっちまった。いまは指物師さしものしも建築屋とお

んなしことさ。見てくれさえよければ中身がどうあろうと、つてわけだ・・・(中略)

昔はそうはいかなかった。富村(時代家具の創始者富村長松親方のこと―筆者註)に菓食つてた職人連中なんぞ、そりゃアやかましいもんだったよ。」(52ページ、指物師、茂上恒造さん)

少し引用が長かったが、職人の心がよく出ていると思われる。こういう心は当世風でないことは誰よりも職人衆がよく心得ているようである。

「昔の職人は『銭をとるばかりが能じゃねえ』こう思っていました。」(建具職たてぐ、川村富五郎さん、39ページ)

「イイエ、貧乏はしづめにしてきましたからもう馴れてます。そいつは良いんですが仕事のわかつてもらえないときが一番腹が立ちます。」(飾り職、樋口金正さん、249ページ)

「あたしらの商売が『斜陽』だってえことは、どうやら間違いないね。」(塗師屋ぬしや、横山吉次郎さん、続113ページ)

「着物のがらとおんなじで、建具も変ったものに人が集って、地味な仕事は見てもらえない世の中そうですね。」(建具の田中才次郎

さん、続61ページ)

当世風でないことを自覚していることは、しかし必ずしも卑下しているわけではないのである。むしろその逆である。

「いまの家具屋の品を見たら、死んだ富村は涙をこぼすだろうねえ。五尺間口の棚に五分五厘厚って品を平気で使ってやがる。テンバは七分五厘、間は七分はいるのにねえ。物でものせたらしなうてしやうがねえだろうに。『ワイの吊った棚に物のせ(る)なァ!』ってのは大阪落語で聞いたことはあるけど、いまの家具屋はみなこのデンス。」(指物師の茂上恒造さん、53ページ)

現代の人の作ったものが本物でないことを嘆いている。この人々にとつては、現代風というのは唾棄^{だき}すべきものであるのだ。このことは逆に言えば、自分の仕事に自信があるということであろう。それはただ主観的なものではない。物として本物だという裏付けがあるのである。物をのせたらしなうてしやうがないようなものを作るなんてことは、お話にもならないわけである。本物というのは、その物が、物として必然的にあるべき姿をもっていることであろう。その役割を果たすために持たなければならぬ最適の姿をもっているのである。そういうものを作る心をもっている。そういうものを作る神経をもっている。あるべき機能を見抜いて、その機能をそこに実現するセンスと腕、手の働きとをもっている。つまり、本物をつくる行動能力をもっているのが本物の職人なのである。

こういう行動能力、神経の働き、心の働きをもった人が材料と対決して働いている姿を想像してみるとよい。それは単に言葉で「働いて」いるな

どと表現するだけでは言いつくせないものがあるのではないか。

現代の、働くとか仕事とかという言葉には、金銭、職人衆のいわゆる銭の概念も入っているので、妙な雑音を含んでいるけれども、この職人衆のものををつくる行動の中には、そういう雑音が感ぜられないのではないか。純粹に仕事をしていると言っても言うのだろうか。

こういう人間のはたらきが、良いもの、いわゆる名作をつくり出すのであろうし、そういうものをつくる人を名人というのではないだろうか。

「昔の人は考えてる。座布団を敷いてその厚みをみて、のばした手がスナナリ一番らくで美しく見える火鉢の高さは七寸五分だ。」

(茂上恒造さん、55ページ)

これは現代の名人が昔の職人をほめた言葉だが、火鉢の寸法もただ決められた寸法で作るのではなく、いろいろなことに神経を使つて設計されていることがわかる。

また庭作りの名人の言は次のようなものである。

「庭というものは、できたその時だけを考えて作つたつてサマになりません。」(造園家、飯田十基^{じき}さん、146ページ)

これは造園には、ただその時だけでなく四季折々の眺めから、また植物の成長のことも中広く構想しなければ本物にならないことを示している。これはかなり複雑な神経を使う仕事だということが想像できるのである。

「今の仕事はやりっ放しが多くなつて、例えばペーパーなんかの下ごしらえが充分じゃない。だから仕上げがその割に綺麗じゃない。スプレイだなんて、吹きつけを銃^{ガン}でやることを知つたために、却つて仕事が上がつ面になつちやつて、心とペンキをスリこむ事を忘れ勝ち

だ。」(塗装の綱島常吉さん、続121ページ)

本物としてつくりあげるための神経の使い方が足りない。手を抜いている。努力をしないといってもよいかもしれない。なすべきこと、必然的な行動の段階をはずしていることになるのである。心が自分の目の前にあるものの必然のあり方に結びついていない。物が本物にできあがって行く過程に心がとけこんでいない。逆に言えば人間のはたらきに抜けおちがあるから、出来上がるものも、どこかでぬかりがあるわけである。

そういうことがあるのは、できないからではないのだという。

「ほかの同業がそれをやらないのは、出来ないからだとは思いません。心を凝らして基本に従ってキッチンとやれば誰にだって出来ることなんです。皆さんがほかに誰一人おやりにならないのは、現代そんなに手間をかけていたら、経済的にアワないから、それだけのことだろうと私は思っております。」

(飾り障子の佐藤重雄さん、359ページ)

誰にでもやればできるというが、しかしそう簡単にはやれるものではない。なさそうである。この人達は経済的にアワないことを現にやっているけれども、経済的にアワないことを何故やっているのか。アワなくてもキッチンとした仕事をしないではおれないからであろう。この人達にとっては、そういう仕事の方が、生きるに甲斐ある仕事なのであろう。それだけの覚悟か何かがなければ、やはりやれないのである。だから多くの人々はやらないのだ。経済的ということを考えたらやれないのだ。

こういうように考えると、経済というのは人間の純粋な働き、人間の能力を発揮させるのに逆の作用、マイナスになっていることになる。

われわれは現在、なんでも経済を主として考える習慣を強くもってしまつて、しかもそれが、人間のためになる、よいことだと思ひ込んでいるが、少し思い過ぎかもしれない。

思い過ぎているので、大事な何かを見のがしてはいないか。現代の人は何を目ざしているのか。或いはこれは、社会は何を目ざしているのかと言いかえた方がよいかもしれない。現代はここにあげられている職人衆とちがつたものを目ざしているのかもしれない。どこがちがうのか。そういうことをもう少し具体的ににとらえてみる必要があるであろう。

現代社会はあるべき本物をつくる人間の心をむしろ、働かなくしているのではないか。みんなが経済、経済と考え、なんでもかんでもそれをもとにして物を見たり、作ったりすることになると、本物を作る本物としての人間の活動がいつの間にかひんまげられてしまふのではないか。それは弱い人間だからかもしれない。という意味は、ここにあげたような職人衆は、「なんでも経済」の世の中でも本物を作る本物としての人間の能力を発揮して、それ故に名人といわれ、立派な職人といわれている人々である。そういう人がいるのも事実である。それはある意味で強い人、すぐれた人といえるかもしれない。その人に比べれば、多くの人は弱い人なのかもしれない。

しかし、多くの人にも、強い人とおなじように、本物をつくり、本物の人間としての能力を発揮してもらいたいものである。それには、なんでも経済という今の世の中を少し変えて行く必要があるのではないだろうか。

私はこのことをただ職人の世界のこととしてのみ考えているのではない。近代技術の世界にも同じ問題があると思つている。そこではそんな技

術や心はいらないというかもしれない。果してそうだろうか。それは経済を主として考えたためにそうになっているのではないか。その考え方がだんだんエスカレートして、近代技術の世界は、人間を人間的な能力を発揮するものとして取扱う世界でなくなつて、人間を機械の部品のように扱い、人間の能力を発揮させなくなつてしまつていのではないか。それらの人々は古代社会の奴隷とどれだけの違いがあるだろう。そういう様な人間の扱い方をしていることは、人間社会全体にとって大変な損害になるのではないか。企業にとって経済的にプラスになることが、必ずしも人間社会にプラスになるものでないことをよく考えなくてはなるまい。経済的ということが錢だけの問題だとしたら、それはいけないと言ふべきだろう。

いい人間を生み出す企業、本物をつくる企業というものがあつてもよい筈だが、そういうものが少なくて、「経済的な物」ばかり作つていのはどうしたことだろうか。企業となるとそうなるのだろうか。それとも人間が本来そういうものだろうか。それなら職人衆は変わり者なのだろうか。企業というのは集団で、職人というのは個人であることは言うまでもないが、企業という集団になると、どうして本物をつくることにブレーキをかけることになるのだろうか。企業は経済を考える。それがブレーキになるということなのだろうか。本物をつくる集団ということにどうしてならないのだろうか。そうならないのは、経済というものの考え方に、何かが欠けているのではないか。

それは集団というものがもつ体質ではなく、人々が何を目ざしているかという、集団以前のものに帰着するのもかもしれない。しかし一般に人間は弱

いものであるから、社会全体が、或は集団が経済的利益を追究することになれば、それに流されることになってしまう。余程強い人でなければ、それと相反するような生活の信条をもつて、それで生活していくことはできないものである。こう考えるとこの問題はなかなかむずかしい問題である。そこには極めて深い教育問題、人々の心のあり方をきめる社会のムードの問題、全体と個人との関係の問題が横たわっているようである。

これはむずかしい問題だから、結論はもう少し先へのばして、しばらく職人衆に目を向けて、職人衆のような、経済をこえて仕事をする心は、或は腕は、どうしてつくられたかを問題にしてみよう。

3 身体でおぼえることのきびしさ

(本物をつくる身体)

本物の仕事をする心をつくるには、それだけのきびしさがあるようである。それ相当の修練がいるのである。そしてそういう修練によつて心の習性ができなければ、本物をつくるというわけにはいかない。本物をつくらうと思うだけでは本物をつくることはできない。反対にそんなことを思わなくともひとりでに本物ができるといった方がよい。つまり心の動き方、手足の動き方、目の動き方が本物をつくるのである。習性となつた行動能

力が本物をつくるわけである。

そういう行動能力をつくるには、一般に言われているようにきびしい修業が必要である。そのきびしい修業とは何であろうか。われわれはきびしいという言葉にしても、よく考えてみると何もわかっていないのである。きびしい教育などという、ただ口やかましいぐらいにしか考えていない。きびしさとは一体何か。

手がおぼえる

「針を使えなきやア良い職人にはなれねえ」って言われまして、夜なべには毎晩運針うんしんの稽古です。」(329ページ、藤代重さん)

これはバンコ屋つまり椅子張り職人の藤代さんの言である。この仕事はどんな風にやったかという、

「しかも『糸と布とがもったいねえ』というので、糸のついてない針をチクチクチクと運んじや、ソーとしごいて、布にあいてる針穴の間隔が揃ってるかどうか見わけらるんですが、糸のついてない針で縫うってのは、いかにも張り合いのないもんですよ。」

というやり方である。現在のシヤレた言葉を使つて言えば、トレーニング・シミュレーターなのである。これで手がおぼえてしまうという所までの修練が修業の本質なのである。手がおぼえるといっても、実は脳がおぼえるのである。動物の脳が周囲に反応していく姿にはいろいろあるが、仕事を、身体を動かす神経が育つて来るには、くりかえしが必要なのである。こういうことがいわば修業のきびしさなのである。わがままは許さ

れない。否応なしにその対象に対して一定の行動を強いられているのである。

しかし考えようによっては、人間は歩くということも、飯を食うということもこういう身体がおぼえた行動なのである。幼児の頃のかえしの訓練が、大人になった時の意識ゼロの行動を可能ならしめているのである。藤代さんの修業は、十四才の頃の話である。子供の頃のこの修業が今の名人芸をつくっているのである。この藤代さんには、父の従兄弟に「鷲塚の猪之いの」というおじさんがいて、その人の世話で藤代さんは奉公に出る。「あたくしは学校がきらいで」「奉公がしたい」と念願していた。そして奉公に出るが、「身内のいる店は当人に我儘が出ていけねえ」というのでおじさんの所へはいけない。仕事ができる身体をつくるということは、我儘ではだめなのである。我慢が必要である。そこにきびしさがあるのである。

「むずかしいのは金ヅチの使い方ですねえ。地金を叩いてまっすぐ平らに延ばすというだけのことが、そいつがなかなかできないもんなんですよ。金ヅチが、平らにおりてくれないんです。地金は紙のように延ばすと反ったり曲ったりするし、厚い薄いができるし、それをうまく金ヅチが使えて、目をつぶつても手を叩かないようになるまでには、そりや年季がいるんです。」(244ページ)

これは飾り職樋口さんの言葉である。目をつぶつても手が自在に動くようになるという修業なのである。これはしかしほんの一部のことである。こういう神経がいろいろな面に育つて来るのには、やはり修業はきびしいものである。人間の脳は目をつぶつても仕事ができるような

動き方をおぼえる能力をもっているが、しかしそれは簡単にはいかない。年季つまり時間がかかるというわけである。途中でやめてしまつてはゼロになってしまう。樋口さんはそれをやり通して、そこまで到達したのである。その人の言葉は、あだやおろそかには聞けないのである。「そりゃ年季がいるんです」という言葉には千金の意味がある。

身体をつくるということは場合によっては身体の変形をも伴う。それは文字通り変身である。次は「畳屋恵さん昔話」の主人公田村恵三郎さんの述懐である。

「このトコ作りが難かしいんだ。なんしろ、ワラ一本ずつを並べて作るやつの中に、かけ縫いっていつて筋を八本から十五本まで通すのを覚えなくちゃならねえ。

ふつうの畳は八通りぐらいだが、贅沢な床は十一通りから十五通りまでも通すんで、これが出来ねえじや一人前の下働きじやアねえ。そうなるまでにヤアヒジも固まつてまっ黒になつてね、『畳屋のヒジ』つてのが出来上るんだ。初めは血が出てねえ、へりの下に入れる紙に血が通つてビッシヨリになるんだよ。だから小僧がドヤされる時の一つ言葉は、『何だ、まだヒジも固まらねえくせをしやがつて』つてんだ。」(107ページ)

これが物をつくる人間の修業というものであろう。それが名人といわれる人となり、心のこもった“もの”をつくることのできる人となる修業というものであろう。こんな話はザラなのである。

「見てください。この左手の小指の根元にこんなにタコができています。これはヤスリを挟んで押しつづけて来たからなんです。

す。」(飾り職、樋口さん、248ページ)

生物は環境とのかかわりで、またその影響の中からおのれの体をつくり出して行く。生物学者が、戦後日本人が急に身長と体重を伸ばしたのは、遺伝のみでなく、環境のあり方が大きく働いているといっているが、職人はものを見つめて、それをつくりあげる過程でおのれ自身を新しい姿につくって行く。新しい身体をつくって行くのである。

これはどんな仕事でも同じといつてよい。

次は鑊画こてえの池戸思楽さんの話。

「ハア？　そうです。彫刻がうまくなろうと思つたら、やつぱり土台の左官仕事をしっかりと固めとかなくちや駄目です。ハイ。一人前になるまでには最低五年はかかりますな。」(93ページ)

この左官仕事が始まると固めていくには、きびしい修業があること。はもう想像がつくであろう。思楽さんは、大部分は下ごしらえの仕事だと言っている。はじめは庭掃きや道具の掃除などからはじまる。それから才取り(土刺し)で、下にいて親方や兄イ衆に泥を棒に突っかけて渡す役、それから土こね、調査、それからやっとなつてコテをもつといった具合である。

中村勝五郎さん(石屋)は石屋という職業を身体でおぼえた体験を次のように語っている。主人の倅でも徒弟と一緒に、石を抱く仕事から身につけて行ったのである。

「真夏の炎天に、サルマタ一つで大谷石を荷車で運んだ辛さなんてものはお話ししても分つて頂けますまい。石つてものは重いもんですよ。」

そして石つてものは固いもんですが、その扱いは豆腐よりも大事

に扱わなくちやならないというのが石屋の心得です。(中略) 転がす
んでもワラを敷いてムシロを巻いて、肩でかついで、まるで娘を
扱うみたいなもんです。」(132ページ)

道具をつくるフイゴ吹き、それからノミ、ツチを使って石を削るという
仕事もまた細かい段階がある。

修業のきびしさの一つはこのように身体でおぼえる事にある。あるいは
身体がおぼえる事である。わかったなどと思うことでない。わかるにはあ
まり時間はいらぬ。できるとなるとそうはいかない。現代人は、わかる
という言葉をいろいろところで使うが、仕事をおぼえるのは、どんな点
から見ても現代のわかるということとは全くちがうといった方がよい。で
きるようになるということである。

このことは現代人にはわかりにくいことになってしまった。残念な事に
それは教育、学校教育のせいである。学校ではわかることばかりを問題に
して、できるという目標を忘れてしまった。

わかるというのは、実は「わかったと思う」だけのことである。それは
実は「本当にわかる」とわれわれが呼んでいることは完全にちがうので
ある。わかったと思うことは誤解でしかないことが多い。しかし仮に正解
だとしても、わかったと思うということは、それだけであって、できるこ
とではない。できることならそれは事実としての行動であって、わかるこ
と即ちわかると思うこととはちがう。

仕事をおぼえるというのは、仕事ができるということであって、行動で
きることである。だから単にわかることでない。いなかると思うことに

よってそれで安心すれば、かえってできることにならない。できるために
は身体が動かなくてはならぬ。ということは神経が働かなくてはならぬと
いうことである。身体が自在に動くように神経の働きをつくりあげる努力
をしなくてはならぬ。それは大変な努力がいるのである。ところがわかつ
たと思うことに満足すれば、そういう努力をしなくなる。わかったからそ
れでよいと思う所で終着駅になる。それでは身体は動かない。つまり口は
達者だが何一つ出来ないという状態になる。これが人間を成長させないも
となのである。

4 構えを身につける

ところで身体でおぼえるというのは、このように手がおぼえるという
ような言い方をされるようなことばかりではない。もつと身体全体がなれ
て来るといふようなこともあるのである。いや本当のことを言うと、これ
まであげた例も決して手だけがおぼえているのではない。手の動きを決め
ているのには目だつてあるし、その他仕事によつてさまざまだが、五感と
いわれるさまざまな神経が使われているのである。そういうことを、これ
まではただなんとなく身体がおぼえると考えて来たが、もう少し詳しく見

てみる必要がある。

たとえば次のようなことも身体でおぼえる事である。

「真冬の厳寒でも、フランネルの白い下着一枚だけですぐに腹掛けももひきと腿引で、それに裏付きの印半天一枚だけ。腹掛けには紙一枚入れてもアガギが悪くなるってどやされました。」(建具の田中才次郎さん、続57ページ)

これは建具屋さんの仕事の身構えの話だが、ペンキ屋さんの綱島常吉さんの若い頃の修業は、

「どんなに寒くっても、手袋をはめての仕事は金輪際ならねえ、手先指先がバカになったらこの仕事でおまんまは食えねえ」と細かくやかましく注意されたという。(続120ページ)

仕事そのものが、このようなきびしさを要求するのである。これも身体がおぼえなくてはならないことである。

「職人にやア身構えが必要だ。凡ての仕事は身構えがコンポンでってんだよ。柔道や剣道だけじゃねえや。身構えが出来てなくて良い仕事の出来るわけがねえや。」

「道具の扱い、仕事の仕方、穴を掘るにも定石じょうせきがあらア。」

「昔からの伝統ってやつやつの形をしっかりと覚えてから、それから自己流もよからうが、基礎が出来るまで仕事を崩すことは絶対ならねえーってこう言うのよ。」(九十に四年の指物師、69ページ)

これは小川才次郎さんの言葉だが、ここには身構えというものに対する深い意味が語られている。それは単なる外側の恰好ではないということである。剣の道で動と静などというが、構えというのは、静的にとらえれば

形としてとらえられるが、それは常に動きのもとであろう。どういう動きでもできるのが構えであろう。それではじめて仕事の構えとなる。そうだとするとこの構えは、ある意味では仕事のための行動すべてを含んでいるとも言える。自分の対象とするものについても自由自在に対決して行動できるのが構えである。身構えが根本だというのはそういうことだと考えると、それは最後に出来上った構えを言っているとも言えよう。そういう構えができていければ、これは何に対してもこわいものなしとも言える。その意味で根本であるとも言えよう。

このように考えると、一定の身構えができ上るといえるのは、出発であると同時に、終点でもあるのではないか。よく剣の道で、最初に構えたとき、それだけで勝負がわかるというのは、その終局のものがすべて構えにあらわれるであろう。柳生宗矩やぎゅうむねのりの兵法家伝書へいほうかでんしょにも、よく修行の行きとどいた人の前に出ると身もすくむ思いがするものだということが述べられているが、そういうこともこのように考えて来ると尤もだと思われる。

身体の構えというのは、だから静的な形としてとらえてはならない。むしろ全身的神経の働きという方が正しい。たとえば、自転車に乗っているときの構えというのは、決して簡単な構えではない。身体のバランスをとっているさまざまな神経の総合的な働きのあらわれである。足の先から手の先まで、頭のとっぺんまで、神経が行きわたって、はじめて自転車が倒れないで立っている。動いていると言えない程静かに進んで行く。

構えというのはたとえ身構えといわれて身体のこととして考えられていても、実際は神経の働きであり、心の動きであるすべてのものを含んで

いる。その全体的表現が身構えなのである。そういう人間をつくるのに、まず形としての身構え、服装が最初に問題になるのである。そこから出発して、動きで完成するのである。形から出発して、中味がうまるのである。そのプロセスが修業なのである。中味をどのようにしてうめて行くのか。その中味をうめて行く過程が一つ一つ自分のこれまでの行動の仕方を切りかえることだとしたら、仕事の修業は大変きびしいものになる。つまりただ受身でおぼえるというだけでなく、自分で自分を否定し、新しい自分をつくって行くのである。文字通り変身の過程である。行動の仕方の切りかえである。行動の変容ということをわれわれは簡単に考え勝ちだが、そんなに簡単なものではない。過去の自分を否定し、新たな自分の行動をつくり出すことである。

こういうように見て来ると、構えというものをつくるには、実は大変な修練が必要なのではないか。この修練がきびしい修業といわれるものにながっている。職人衆の話で、どれ一つとしてこのきびしい修業につながらないものはない。

ところできびしさというと、日本人はすぐゲンコツにつながる考え方をするが、これは誠に素朴な考え方、否むしろ単細胞的でさえある。職人衆の話の中にはこの単細胞的きびしさというものは殆んどない。またゲンコツの話があっても、それは仕事の修業のきびしさと必ずしも結びついていくわけではない。親方の人柄の話であったり、愛情の話だったりするのである。それは一種の環境条件なのであろう。あるいはきびしいということの程度を表わす尺度として使われているときもある。

きびしさそのものの本質はそんなものにはないのである。きびしさは仕

事の仕方、つまり修業の中味そのものももっているのである。

構えというものが出発点であると同時に終点であるというのは、教育の目標としての考え方として位置づけてみるとなかなか面白いことである。

たとえば弓を射ることができるように教育するという事例を考えてみよう。この時、修業者は弓を射る構えから教えられる。的に向ってどのように脚や足を構え、腰はどう、腹はどう、肩はどう、頭はどう、いろいろに教えられる。的は自分からはなれた向うにあるけれども、自分がしなければならぬことは、自分の身構えなのである。そしてそれができればひとりで矢は的に当たるようになる。その時は修業によってはじめの構えとはまるでちがう構えの中味をもっている。こうなったとき、教育の目標が達せられたことになるのである。

一般にわれわれが教育の目標というとき、どういうことを頭に描いているであろうか。目標は、弓を射るときのように、自分のところから離れた遠方にあるなどと考えているのではないだろうか。そういう考え方はおかしい。

学習するものが、あることができるようになるのであるから、目標というのは、今の自分自身にあるといった方が正しいのではないか。向うの方にあつて、そこへ歩いて行ったら到達できるというようなものではあるまい。その辺の考え方も近代の教育では、はっきりしていないのである。それは教育が人間の行動力を育てるということを忘れて、人間につめこむ知識あるいは技術といった「もの」を人間からはなして考え——それが実は架空のことでまちがっていたのである——それを人間に少しずつ与えて行

くというように考えた。そうするとそれら与えるものを全部まとめて、それを目標というように考える。それは人間から遠く離れた所にある。そこへ近づくプロセスが教育だと考える。人間はそこですっかり忘れられてしまつて、いわゆる教材、知識や技術の系列だけが考えられる。

知識というもの、技術というものが人間からはなれてあるのではない。知識というのもある対象にある行動の仕方に対決したときの対象があらわす姿であつて、対象の方に投射をして把えているが、実は自分の行動の仕方が生み出しているのである。自分の行動の仕方をもう一步自分がうしろへさがつて見た、自覚したときのことだといったらよいであろう。技術というのもそうであることは、これまでに引用した職人衆の言葉からもうかがえるであろう。自分がそのように行動できるということであつて、人間の行動の仕方の表現なのである。たとえば近代技術による壮大な装置を見ても、自分がそれに対して行動できなければそれは単なる鉄のかたまりにすぎない。これを生み出し、使用する人間は行動できるのであつて、それは自分の身体の分身がそこにあるのである。その人間の行動の仕方こそが技術なのである。それは人間のものである。

近代教育は、知識や技術を人間から離して考えた所に、人間の形成に対して非常に大事なポイントを喪失してしまつた。人間の墮落がそこから始まつたのである。これを改めて考え直すことは、近代教育の立て直しにとつて極めて大切な事であろう。

つまり学習者の構えを、行動する構えに切りかえなければ、真に人間としての立場に立つて物を考え行動する人間になり得ないのではないか。この点からあらゆる教科の学習も考え直されてよいのではないか。

5 心の構えをつくる

現代の教育のようにわかるということを中心にした教育には、このようなおのれの否定によつて、対象と自己との統一をつくりあげるといふような修業は生れて来ない。わかるということは肯定の連続なのである。つまり知識を受けとるといふのは、受身であつて、おのれを否定する必要がある。わかつたと思えばよいのである。たまにはわからないという場に立つて、わかるためには、おのれ自身の思考の仕方を転換する必要にせまられる。しかしそういうことはめつたにない。それはわからないままに記憶しておけばよいという態度でその場を通り越せるからである。またわからないことを逃げてしまうことも可能なのである。

ところが仕事をするという場に立つたときは、それでは通れない。逃げられない。どうしても、眼前の対象にふさわしい自分の行動をつくりあげなくてはならない。そこにきびしい自己否定が必要なのである。それが修業のきびしさなのである。そのきびしい対象と自己との対決と交流を通じて、そこに一つの統一した世界がつくられる。そういう世界に入るともう否定でなくなるであらう。無心の境地で対象と結合する世界に入っている。現代の教育にはこういう境地へ人間を入れる通路が閉ざされているのではないか。そこに人間の墮落があるのではないか。人間が自然からはな

れ、環境を度外視して行動するのもそうである。人間はただ単に知識というものをもてあそんでいる。それは何等かの利をもたらすものとして自分の視野に入ってくる。そのものへ自分を没入させるものではない。学習は知識というものを振り廻すためになされるのである。それは人間が自分の環境から浮いてしまっていることになる。軽薄才子の横行する所以である。

道具に対する心構え

道具に対する心構えは職人衆では大変にきびしい。良い仕事と直結するからだという。

故中沢猶太郎さん(大工)の言葉として、

「材料や道具や、長上に対するおそれとつゝしみがなくつちや良い仕事はできません。昔の五人の仕事をいま七人かゝってもやれないというのは(中略)職人の根性が抜け、腕が落ちてくるからじゃないでしょうかね。」

今の職人の道具のみがき方、コシラエ方の乱雑さ、始末の悪さは、ありやなんですか」(八十年の根性話、続11ページ)

というがある。

職人の根性が抜け、腕がおちているあらわれの一つを道具の扱いで表現している。現代人は道具を単なるものとして自分から離してしか見ない。ものが豊かな時代ということも原因であろうが、次々へと物を使い捨てる。そういう時代の傾向もあって、道具というものについても、多分に使い捨て的感觉になっあじかたしらべているようである。次は味方寅次さんの話である。

「そのしつけの厳しいことは、『寅さんは継ッ子じゃねえか』なんて言われたぐらいなもんで、道具なんかだつて、ノミやカンナを仕事にかゝつてすぐいであたりなんぞしてたら、首をくくりなくなるような叱言こりごを言われたもんだ。」

「仕事にかかる前に道具はドキドキにとぎあげておくのが職人の心得だつてことは、十六で仕事につくと同時に叩きこまれていたんだ。」(大寅道具ばなし、同13ページ)

また、こうも言っている。現代の人は、

「道具に対しての扱いや感じがまるつきり違う。俺たちには道具はタダの道具だけど、あたしらの年頃に仕込まれたものは、道具は女房みtainなもんだし、大ゲサに言や、命みtainなもんだ。」

ここには「道具」に対する人間の本質的なフィロソフィーが語られている。現代人にはそれがわからなくなっているが、本来道具は人間の手足、いな心の延長なのである。われわれはそういうことを日常感覚としてもつてもいる。たとえば使い古した時計とか、煙草のパイプとか、万年筆とか、茶道具とか、さまざまなものに愛情をもっている。それに愛がついている。心がついている。愛着という言い方をする。決して使い捨てる気にならない。それは自分の半身だといつてもよい。

大工道具が女房みtainだとか、命だとかいわれるのは、それだけ働きをとにしたものだということである。それを通じて、おのれの心が外へ出て行つたのである。それなしには、自己を表現できない。そういう意味では大工という人間にとっては、それはおのれ自身の手足あるいはそれ以上といつてもよいかもしれない。

そういうものとして道具をおのれのものにするには、そこにきびしい修業がなければならなかった。それは仕事にかかる前にドキドキしておかなくてはならなかった。仕事にかかってから道具の準備というようなさかさまなことをしたら、首をくくりたくなるような叱言をいわれるということになる。それは道具に対する心構えというしつけなのである。それを単なるものとして扱わない心や身の構えのためのしつけなのである。つまり身体の準備とおなじように道具を準備するのである。サアやるぞと手足を構えるように、道具も構えられなくてはならない。

そういう境地に入れるための叱言であり、否応なしにそこへ入れこんで、その行動の仕方を体得させていったのであろう。それが、しつけだった。きびしさというのは、その迫力の表現であらう。人間は誰もが、生れながらそういう境地に居るものではなく、そういう行動の世界の中で、おのれを形成していくものである。従って、それはやはり、日常的ないわゆる常識の世界でぼんやりと暮していたのでは到達し得ない境地である。やはり外からのしつけ、強制が必要だとも言える。本来人間の本质としてそういう本性があるけれども、環境とのダイナミックスの中から、人間のその本性が具体の姿をとってあらわれて来るといったらよいかも知れない。

「だから腕の良い職人は道具を大事にしたもんです。道具が悪くちやいくら良い腕でも仕事は出来ませんし、良い道具を選び、使い込む、つてことも腕の一つじゃありませんかね。」(続80ページ、左

官、まさた 蒔田常次郎氏)

「それでも腕のナマなうちは根性もナマなもので、さつき言ったような赤ッ恥をかいちまったから云々。」(大寅道具ばなし、13ページ)

ジ)

ここには腕の良い職人といわれる人は、心と身体と道具とが一体になっているということが語られている。この大寅さんの赤ッ恥をかいいたというのは、十八才のとき、仕事場で年寄りの職人に「すいませんがちよつと小ガンナを貸してもらえませんか」と頼んだら、その年寄りが、ジロリと横目で流し目に見てなんとも言えない笑い方をする、小ガンナを渡して寄越しながら、「ハイヨ。あると重宝だよ」と言ったという話である。(12ページ)

大寅さんは「あたしは地ベタを転げまわりたいほど恥かしい気がしたもんだ」と言っているが、これがきびしさというものであろう。しかしこの時、この年寄りの皮肉を地べたをころがりたい程強く受け取ったというのは、すでに心ができていたからでもあった。現代ではそう言われてもキョトンとして平気である人間の方が多いのかも知れない。それでは、大寅さんのような境地に入れないであらうし、従って仕事も出来ないのではない。つまり職人として一人前になれないのであろう。

仕事のむつかしさというのは、言いかえれば道具を使うむつかしさである。

「どうやらコテを持つ所までは来ましたが、おやじのやかましいこと！ コテはそう使うもんじゃねえ、こう使えねえのかと、口よりは先にゲンコが飛んで来ましてね。」

家にいる職人がまた『主人の倅だからって遠慮はしねえぞ』という職人氣質でコテ使いをやかましく言うー。」

「コテの使い方、上手下手が分るのはもとよりですが、コテを見た

だけでも分るものなんです。職人が来ると、『オウ、コテを見してみな』と言って、そのコテ先が減っていいものなら、お断りです。塗り方の中首のコテは、元が減るように使うのが秘訣です。」

(95-96ページ、思楽老コテばなし)

ここには道具を使うという言い方であらわせないものがある。道具と手・腕・身体が一体となっているのであろう。つまり一つのまとまった行動の仕方である。さらにその行動の対象、向いている相手がある。材料がある場所へ塗って行く。ぬるもの、ぬられるもの、道具、人、すべてが一体となって進んで行く。そのつながりの中の一つのふしとも言えるのが道具といわれるのである。仕事を一つの全体の動きとしてとらえているのである。それは単なるものではない。自分の触覚が延びていつているものという生きものとも見るべきであろう。

道具を使いこなすなどという言葉があるのは、そういうことを意味する。自家薬^{じかやく}ろう中のものとするなどという言い方もよいかもしれない。結局は手につながっている。いな心につながっている。身体になっているということになる。

これは道具をつくる、自らの行動に合わせて、自らの手先をつくって行くということに発展する。

「道具？ ああ、この引き出しを見てくん。ノミ、カンナ、キリ、小刀、そのほかノコ、合わせて五百挺もあるだろう？ 中にヤア自分で作ったものもずいぶんあるんだよ。」

カンナ一つだって、柔らかい木にはこのキワガンナ。脇息の足だ

の蛇腹^{じゃばら}なんてえ所は、このカンナのカドで責めるんだ。こんな豆みてえなカンナは売ってやしねえ。自分で作るのさ。」

「あたしが三年使うカンナを小僧に任すと一年でダメになっちまう。これも研ぎ方のコツ一つさア。」

(68ページ、九十に四年の指物師)

道具をつくるのは、自分の手足をつくることで、それで自分の世界を作って行く。生命の創造の世界である。

「道具なんかもみんな自分で作ったもんです。今はカッコいいのを売ってますが、やはり自分のクセに合わせて手作りしたのにヤアかないません。」

ハイ、両頭針なんか、洋傘の骨で作るんです。反^そり針も三寸針をローソクの火でこう焙りましてね、ヤットコで自分の仕勝手に良く曲げるんです。」(椅子張りの筒井辰次郎さん、347ページ)

道具を作るといふ仕事もまた一筋縄でいく仕事でない。それはそれとして大変な修業が必要なのである。それもまた小僧の頃から悪戦苦闘して身につけなければならぬことである。

「この伊庭つてえ親方は、実にやかましい人で、それにまた叱言がくでえんだ。道具のこさえ方から磨き方、一々そばにくつついて、いつまでもブツブツ、ブツブツいつてるんだ。」

「当時小僧は苦勞したもんだよ。カンナの台だつて、木を買って来て自分で彫らされたもんさ。榎^{かし}の木を水につけといたやつを彫って刃を上げるんだ。そのカンナが何十丁となくある。それをみんなやる。親方はくつついていて、ブツブツいう。うるせいのなんのつて

ありやしねえ。固くなつてよけい手元も狂うわけだ。そうするとまた叱言だ、当時は『あゝうるせえなア』と思ったが、気がついてみりやア、今のあたしがトント当時の親方だ。あゝ情けねえとは思わねえ。仕事を大事にすりやそうなるんだ。」

（続89ページ、さしもの夜話、溝呂木義郎さん）

こういうきびしい場で鍛えぬかれて、はじめて自分の身体にあつた道具もつくれるようになるというのである。親方が口やかましいのだというより、道具そのものがそういうきびしさを要求するのであろう。そこではじめてそれに負けない心の構えが出来るということなのであろう。

職人心をつくる場

次の例は、塗師屋の故横山吉次郎さんの仕事をおぼえた苦労話である。横山さんは石川県の生れで、その寒い北国での修業話。元日の行事なのである。

「その寒い元日の夜中の十二時の鐘になると『仕初め』って言って仕事始めだ。膳の二十枚も持つて来て夜が明けるまで『コクソ』ってのをやる。これは塗りの基本で、木と木の合せ目を切りこんでコクソを埋めるんだが、飯の干したものに漆をまぜて、それに櫛屋で櫛を挽く時に出る『木の粉』と『ツタ』という布わたをまぜたものを埋めるんだ。

『ぬし屋』とは言うけど、小僧は最初から塗らしてなんぞもらえない。まずこの『コクソ』をやらされて、それから『カラトギ』表

面のザラザラを砥石でこすって、職人や親方がヘラで漆を塗るのに塗りやすいように下拵えさせられるわけだ。次が小刀とぎ。これはヘラを作るための『ぬしや小刀』という刃渡り八寸、幅一寸の小刀をとぐんだが、ぬし屋はヘラが命だから、こいつを思うように作るためにはドキドキにといっておかなくちゃならない。

それが出来たらヘラ作り。ヘラは檜で作る。小僧のコクソ仕事なんぞは竹べらだが、職人の凝った小物作りは、ヘラの使い方の

前に作り方で仕事の良し悪しがきまつちゃう。だから檜だ。刃

先が一字でなくちゃいけない。波を打ってたりしたら塗りにムラが出ちゃう。コシの付けぐあい、シナリをどこに付けるかも、塗る相手の品で違ってくる。丸物の椀や盃は角度に合わせたヘラを作る。ヘラの大きさは小は一分から大で五寸止りだが、今は四寸の幅のとれるヘラ木なんぞちよつと手に入らなくなっているねえ。

さてこゝまで卒業すると今度は塗りを覚えるんだが、ひと口に『塗り』っていうけど、いやその大変のなんのって。まず、木に生漆をひいて合せ目を矢彫りで彫ってコクソをする。それから注文でカドなんかの要所要所を布張りにする。総布張りにする時もあるし、コウゾの紙張りで略すこともあるが、これは凸凹をおさめるためにやるわけさ。」

（続107・108ページ、天皇の椅子を塗った人）

こんな引用をしているときりがないので、この辺で中止するが、これから地の粉を塗り、切り粉を入れて塗り、砥の粉を塗りして下塗りがおわり、更に中塗り、上塗り、そして八十回も塗るという仕事がつづくのである。

こういう仕事のどの段階もが、意識ゼロで身体が動くように脳と神経の働
きがでさる過程が修業なのである。

こういうのは一口に身体でおぼえるといつても、身体が実にさまざまな
ものをおぼえているわけである。身体つまり脳と神経とにきざみつけられ
ていくものは、単に手の動かし方というだけでない。ある環境である行動
の仕方をしていくさまざまな働き方が、すべて神経の働きとしてきざまれ
ていくのであろう。寒い冷たいところで夜中から夜明けまでコクソをやる
という、その行動がそういう心と身体のある方を人間にきざみつけていく。
さまざまな仕事をだんだん覚えていく長い年月の中に、また人間の仕事に
ついでに全体像が身体と心にきざまれていく。一つの塗りものが出来上つ
ていく過程にこめられている人間の心や身体への働きのこまごまとしたも
のがすべて、その仕事を通じてそれをつくる人間の方にもはねかえつて来
る。いわばそういう仕事を通じて、人間が変身していく過程なのである。
横山さんはこのことについていいことを言っている。

「だが漆つてもものは一度に艶は出ない。何回も何回も重ねることに
底光りがでてくる。そこがまた何ともいえない味のものです、なんだ
か人間の味——つてなもの出来かたにも似てるじゃねえか。」(続1
09ページ、天皇の椅子を塗った人)

全く横山さんの言う通りで、人間の育つ過程は塗りの過程とよく似てい
る。が、塗師屋について具体的に言えば、この塗りの過程一つ一つについ
て人間がつくられていくのであろう。その過程をのりこえて行く間に心と
身体がつくられていくのである。そうしなければ、ものは出来上つていか
ない。だから人間の側のわがままでやれるものではない。物と人間とが一

体になることによつて、物もできるし、人間のもつ力も發揮できるのであ
る。人間もそこに人間として満足できる境がある。

6 主体性の形成—やる気

自分から進んで仕事をしようという人が居たら、馬鹿じやないかと笑う
世の中である。それほど仕事、労働というものが人間にとつて価値のない
ものになりつつあるのである。そういう仕事が一般的になつて来たという
ことは、果してそれでよいのかと考えさせるものがある。ということとは、
既に前にも考えたように、近代社会が次第に仕事を人間にとつて意味のな
いもの、ただ機械部品としての人間がやるものにつくりかえて来たという
ことである。それは長い歴史の一コマであつて、やがてすっかりそれは機
械にまかせる一過程であると考えられることもできる。それならそれで、出来
るだけ早く、機械にして、人間のする仕事は人間でなければならぬものに
しなくてはならぬということになる。

しかし人間の方もある意味では、人間らしい仕事より、機械的である仕
事を好むということもないわけではない。人間としての神経を使うなどと
いうことは避けて、何も考えずただ機械的に仕事をするだけのほうを好む、

そしてただ金銭だけを好むという傾向もないわけではない。つまり自身
身の成長より金銭になればよいと考える、成長とは金銭を得ることと考
える。それは自己の生命、意欲を注ぐものを物質にのみしか見出し得な
い人々といってもよいかも知れない。そういう育てられ方をしたからそう
なったのかもしれない。職人衆は、たまたま自分の生命の力を注ぐ対象を
事に発見することのできた数少ない人々なのであるといえるかもしれ
ない。その意味では若い頃のきびしい仕事の仕方が、それをもたらした
ってよいかもしれない。

仕事は早くやめるもの、できるだけ短い時間働いて多くの報酬をとる
ものという考え方は現代では当り前の思想である。そうでない方がおか
しいのである。さて問題は職人の仕事好きはどうしてつくられたのであ
ろうか。

仕事好き — 働く意欲の基盤

職人衆の中には、かなり多くの人が、子供の頃からその仕事が好き
な人があるということは面白いことである。いわば性にあつてるとい
うわけである。

「私も勉強したかったからね。……つたつて、なにも本を読んで
学者になりたいってんじやなくて、腕の良い大工になりたかったわ
けだ。」（大工重役大いに語る、続34ページ）

と語るのは森武平さんだが、森さんは、

「私が大工になったのは、中学二年の時、親戚へ遊びに行つて大
工の仕事を見ているうちに面白くなったからだ。」

という。こんなのは俗に言う、生まれつき好きなんだという例なのであ
ろう。生まれつきというのはともかく、好きなのは、その時まで経験した
ことから、そうなる必然性があるのであろう。そういうものが、次の運
命的行動を生み出すのである。それが、大工の仕事を見て面白くなる
ことであらう。有名な岩田ガラスの岩田藤七さんは、

「僕は、六つ、七つから職方まわりをしてたからね、その時分から
なんとなく『物を作る職人』というものに興味を持ったね。」

（ギヤマンの虹を大衆へ、225ページ）

と言っている。つまり方向を決めているのは生活なのである。生活が人
間の興味もつくっているのである。だからある時点で、あることに興味や
関心を持つというのは、それなりに理由がある。それを土台にして、次の
一歩をふみ出していく。この点から考えると、職人衆の中に、子供の頃
からその仕事が好きなが多いというのは、すでにそれまでにそうなるよう
な何かの必然性、つまり過去の生活経験があつたのであろう。

こういう考察からわれわれが注意しなくてはならないのは、生活経験
が大切だということである。経験が大切だということは、逆に言えば、
仕事が好きだということとは生れつきなどではないということである。と
かく人々は、ある仕事の名人を生まれつきその仕事で名人となる素質があ
つたのだなどと考え勝ちであるが、それは逆なのではないか。

その証拠に、子供の頃やり切れない仕事の世界に入つたと思つていた
のが、きびしい修業の末、やがて好きになつてのがまた多いのである。
つまり、生活が、すなわち経験が人間をつくるのである。それがまた次の
行動を生み出す。それがあつたものを好きとか嫌いとかという方向を生み出

すということである。

ということは、名人職人衆が、仕事が好きで三昧の生活に入っているのは、若い頃の経験つまり修業が、それをつくつていてと考えてよいであろう。しかしこの経験というのは単に客観的な環境などではない。むしろ主体的な環境、行動環境としての経験である。

「十四で弟子入りした先が横浜の中区相生町の高崎って店で、家の血ですかねえ、建具職って仕事面白くってたまらなかった。」

とこれは故川村富五郎氏の話であるが、「―といったって新弟子の小僧に回って来る仕事なんていうものはギョギョ鋸をひっぱる木挽仕事で、えらく骨の折れる仕事だったけど、こいつもやってみるとなかなか面白い。仕事忙しくなつて間に合わなくなつてくると、親方が当時の金で二銭の賞金を出す。挽きっこして勝つたものにやるってわけです。」

(地蔵の富さん聞き書き抄、36ページ)

こういう場におかれれば、誰でも競争心が出る。そこでいろいろ工夫する。その時ただひっこんでしまつたらだめだろうが、負けん気を出してやるところに仕事面白くなるチャンスがあるわけであろう。

「その二銭がとりたい一心で考えたが、あたしやアご覧の通りいまでも五尺足らずの小男だし、当時十四といやア豆みたいなもんです。けれども削りは体力で負けても、『キザミ』や『スミ』を早くすれば、ほかの五、六人の小僧たちにや負けねえぞ、というわけで、そこに苦心をした。」

こうして仕事が出来れば自信もできる。それがまた仕事好きになるものになる。こういうよい循環がおこつて来る。

大工の木所仙太郎さんは、十四才のとき鬼勝の仇名のある名人鏑木勝之助の弟子になる。そして、

「最初の七年は車力専門だ。朝の四時になると増上寺の鐘がなる。

眠い目をこすって飛び起きると、親方の息子と二人で大八車を引っぱって、この芝の神明から深川の木場までいく。一時間かかって五時。東京の町がやつと目をさますころには、松杉檜材など山積みして、それからまた一時間かかって今度は小石川の伝通院でんつういんの仕事場まで引っぱっていく。仕事場へつけばついたで、渋板を削るなんぞ引合いのものをするほか、必ず一日に三回スツカリ掃除をさせられる。」(仙太郎大工自慢ばなし、29ページ)

こんな追いまわしの仕事の中で、仙太郎さんは、ただ受身になっているばかりではない。

「車を引っぱってるだけじゃ仕事は覚えられないから、作業場を掃除する時に、先輩の仕事を盗んだ。」(30ページ)

昔の職人はなかなか人に教えることなどはしなかったらしい。これをいろいろ工夫して盗むのである。

「たとえばナゲシのカドを組む所なんかは秘伝にしていって見せない。お茶の時になつてもゴザなんかのつけてお茶を啜ってる。こっちは相手が小便に立ったあとなんかにめくって見ちまうんだ。」

といった具合なのである。やはり積極的に仕事をおぼえようとして工夫をするわけである。この積極性が、仙太郎さんを育てたのであろう。

きびしい生活のなかから、そのきびしさを通りこして、それが当り前のこととなり、そうしてそれが習慣となり、その中で自分を振りかえると、

その苦しさを通りこして、その中に楽しみを見つけ出し、苦しさをのりこえて新しい仕事の方向を発見している。かえって益々きびしさを求めている。他律の生活から自律の世界をつくりあげて行っている。そこに新たな前進が始まる。それがまた自分を育てることになる。

現代は「楽」な方がよいという思想が一般的である。「この方が楽だ」というような言い方の中にこの思想がにじみ出ているが、有名なアメリカの社会学者リースマンに言わせると、無努力崇拜という思想だという。つまりなるたけ苦勞しまいとする。こういう思想が機械を生み出すものになったのだという人もいるけれども、併しこと人間に関する限りは、これは馬鹿になる道につながるようである。「楽だ、楽だ」で何もしなければ、能力もつかないことは確かである。第一、機械をつくった人はらくな仕事をしていたわけでなく、いろいろ苦勞をして機械を発明した人ばかりである。

現代人は何かという仕事から逃げることを考える。なるたけ楽をして金を稼ごうということかもしれない、それを経済的打算というのかもしれない。そのことによって、自分が馬鹿になっていることを計算に入れないと大損になるおそれがある。もつとも仕事そのものが本気になって或は生甲斐を感じてやるような仕事でなくなっていることも事実である。産業が人間を機械扱いにして馬鹿でもチョンでも仕事やれるシステムをつくり出したせいもある。その中で生活する人間が、らくな仕事を選ぶというのも致し方ないかもしれない。仕事が単純化し機械的になってしまつて、人間として努力をする場がなくなっている。そういうシステムの中

では、人間はおのれを仕事の中へ没入する事ができなくなっているのである。仕事を身につけようとする必要がなくなっているとも言える。職人衆が仕事で一人前になるうというのとは全くちがった状況が生れている。すべてがそうだというわけではないが、全体的にそういう仕事が多くなりつつある。そこから人間がおのれの生甲斐を仕事に発見できなくなり、仕事はただ金銭のための手段となりつつあると言えないであろうか。これは人間にとって不幸なことである。

職人衆が仕事に打ちこんで、そこで自分をみがきあげる努力をするのは、確かに仕事というものが、人間の努力に値するからである。そこでおのれの全力をつくして、おのれをそこに表現しうるからである。そういう仕事の全貌が自分の前に見えているのである。産業のオートメーションの中の人間は全くのピースワーカーで、仕事の全体の姿が見えない。仕事の結果は見えていても、それはおのれの力とは何の関係もないものだ。それでは自分を注ぎこむ場がないわけである。そこに人間は墮落するしかないではないか。産業の経営者が多くの人間を道具に使つておのれの意欲を注ぎこむ仕事をしているのはよいが、そのことが人々を奴隷にしているということになっているとしたら、それは一刻も早く反省すべきことなのである。

ところで、人間はただ楽をするばかりがよいのではないことは、職人衆の今の価値ある生き方が、過去の苦勞から生れていることを見るとよくわかるであろう。

「……なんの因果でこんな所に奉公させられたんだろうとうらみましたね。なんしろ『仕事が上手になりますように』ってんで、寒

中一月に八幡様やら不動様にはだし参りをさせられたんですからね。十三の子供が寒三十日、毎朝三時に起きて、半天にシャツ一枚でお参りです。霜も凍ろうという厳寒の道をはだして行くんですからね、足もつい早くなって走ってしまいます。―がその時は『ナアニほかの兄弟子たちだつてみんなしんぼうしたんだ!』と思つて歯をくいしばつてがまんしましたね。」

「お参りがすんで帰つてくると四時。それから飯が炊けたら親方、兄弟子の給仕をしながら自分も朝飯です。兵隊の新兵じやありませんが、ひとのお給仕をしながら、ひとゝ同時に食べ終らなくちゃいけないんです。」

「朝飯がすんだら、ふき掃除の雑巾がけからカンナ屑の持ちはこびと、寝るまで忙しい小僧の一日が始まるんですが、……。」

(クリスチャン大工物語、続22ページ、大津鉄吉さん)

こんな苦勞の中からでも、この大津鉄吉さんは自分の仕事を自分のものとして来て立派な名人になつてゐる。自分の仕事で自分でコントロールできる人になつてゐる。そういう状態になるには、どんな苦勞をすればよいのか、今の苦勞もそれへの道であると若い頃から考へて努力して来たのである。何もはじめから好きでやつた仕事ではないかもしれない。たとえ好きであつたとしても「何の因果か」と考えるほど苦勞を感じたのである。そういうことに負けないのが、今日をなした所以であろう。歯をくいしばつてがまんしたのが、成長につながつたのである。がまんしたというのは決して受身のことではなく、逆に「その場へ出た」と言つた方がよいであろう。

「私は意地つ張りで、ひとに負けるのは嫌いな方ですから、夜ナベを十時か十二時ごろまでやつたあと、朝は四時に起きて朝飯前の仕事をやりました。材木を扱つていたので、犀川まで行つて筏いかだをほごしてかついでくる。一町ほどの道を四、五回往復すると冬でもジツトリ汗ばんできます。二間の五寸角つていうナマの松杉をヨイシヨとしよいあげてくるんですから、若いといつてもこたえます。」

そのほか親方の所では養蚕もやつていましたので、三町、五町さきの桑畑まで肥桶こえおけをかついだり、直接の大工仕事ばかりをしたというわけではありません。」(八十年の根性ばなし、続13ページ)

これは中沢猶太郎さんの話である。これは十八才の時の経験を話しているところであるが、もう立派な大人の心を持つていたことは次の話でわかる。

「けれども仕事ということ、生きるということは、どんなに骨惜しみをしないで、体を使わなくちゃいけないか、というようなこと、―仕事つてものは厭々いやいややるとよけいつらいが、自分から積極的にやりかけて、そいつを習慣にして毎朝やれば案外しのげるし、また楽しみさえも見つけることができるもんだ―というようなことを、体を通して教わつた、と思つてゐます。」(同13ページ)

体を通してこのようなフィロソフィーを把握したということは面白いことである。これはだから單なる理屈ではないのである。身体が知つてゐることだという言い方がされるのは、そういう行動が成立しているということである。それはそういう心がつくられてゐるといつてもよい。そういう人間になつてゐるとも言える。だから心というのは、身体と離れてはな

いのだ。心は行動を通して、生活を通して、身体とともにつくられて来るのである。それが人間である。

主体性を育てるもの

こういう過程を見ると、結局は、自分で自分を育てているということになるのではないか。それぞれの職人衆はそれを意識しているのではないかもしれない。もつとそれよりもより根源的に、それを実行している。身体でやっているのである。

ところでこのことについては、面白い話がある。鶴心堂表具かくしんどうばなしの主人公中村豊さんの話である（285ページ）。中村さんが表具をやるなら京都へ行かなくちゃと決心して、夏目漱石の添書そえがきをもらって京都へ行くことになった。そして紹介状の御札に漱石の宅へ行くと、有名な鏡子夫人が出て来た。

「京都へ参りましたら、一生懸命やつて参ります」というと、鏡子夫人が、「そりやあんたの勝手よ」と言った。このことを中村さんは、「なるほどこれはその通りで、これには驚きました。京都へ行きましてからも、時々この『そりやあんたの勝手よ』が思い出されましてね、がんばっても投げ出してもみんな自分の責任だ、がんばらなくちゃーと、良い励みになりました。」

と述懐している。論じつめれば、自主的だということである。すべて自分の責任だということである。自分がやる気になってやらなければ、ものにならないわけである。そのことを身を以て実行する以外にないのである。

ちなみに中村さんは、京都へ行って、このことを身を以て実行している。それは墨光堂岡岩太郎ぼっこうどうという名人の店に、是非いれてくださいとすわりこみの談判をして、とうとう目的を達している。

仕事をするということは或る事をする責任を果さねばならぬという場におくことになる。そこで責任が果せなければ、仕事が実現していかない。それは誰よりも自分が最もよくわかる。それは教科書を暗記して、テストを受けて先生に点をつけてもらうのとは、全く異なった行動である。そのちがいは主体性において行動するということか、それがないかということであろう。

責任を果すということは、今眼前にある事に対して具体的な行動に出なくてはならない。その出る行動はその人間がその時もっている力が出るのであって、それ以上でも以下でもない。そこにその人間の力があらわれることになる。それは自分でも自覚できるし、他人もまた評価する。目のある他人ならばその力がよく見えるのである。そういう世界の中で住むことは大変きびしいことであるが、自己を育てるには大変よいことである。つまり作る世界で仕事をするのがおのれを育てることになる。

若しこの場合にわかるといふことでよいとする考え方があってどうであらうか。そういう考え方を持っている人間がそういう世界にいるとすると、仕事に対して責任を果すことをしないであらう。仕事の間から逃げ出すことにならざるを得ないことになる。

仕事に責任を果すことになれば、場合によっては、わからないでやらなければならぬ。わかる限りでやるというように言ってもよいかもしれない。わかることが大切だという考え方の人間は、わからなければやれない

と考えて降参するのではないか。わかることを求めるから人にやり方を教えてもらおうとするような行動に出るかもしれない。それでやれる時は責任を果たしたことになるが、それでやれない時は、やはり逃げ出すことになるであろう。それは責任を果たすということ以前に、つまり仕事をやるうとする前に、わからなければ出来ないという考え方があるからである。それはやれなくても仕方がない、やらなくてもよいという考え方に移行する。そうして、やらないことをやれないことと言いかえる。やる気はあるが、やれない環境があるというような言訳に転換する。こうして自分から仕事を征服しようとしないうことが、仕事を征服する能力を育てなくしてしまうのである。

またわかることが重要であり、大切であるとする考え方は、わかることを以て目標に到達したと考える。反対にできることを目標とする場合は、眼前の具体のものに対して、具体的な反応の仕方がまず意識の前面に出る。わかればよいと考えることは、その具体的な反応を忘れることが多い。わかるというのは概念的でよいからである。この仕事をこうすればできるなどとわかって、そのプロセスのどこでどう神経を使い、どうがまんをし、どう意識を働かすかなどは体験できない。そういう全体的行動のプロセスの中へ身心をまかせることが習性となっていなければ、主体的、自主的に身心を働かすことはできない。それは仕事をする能力が基本的な点で欠けることになるのである。

仕事は主体的でなければできないのである。よい仕事をするなどということになると、より一層さまざまな神経と意欲とを使わなくてはならぬ。

そういうものを集中し、持続させる習性が育っていないとはならぬ。それはわかるという世界に住んでは、いくらたっても形成されないということではないか。主体性とは自己の責任において行動することである。そういう場において行動することを通じて形成される。知識を受けるといふような無責任の場では主体性を育てるところか、それが失われて行くのではないか。

たとえば刻苦精励とか勤勉などという言葉は当世風な言葉ではなくなりつつある。それはどういうわけだろうと考えてみると思い当ることがある。この言葉には中味がないのではないか。それは人によってみな異なる中味をもっているとも言える。職人衆のこの具体の話を読んでいると、これらの人々は皆刻苦精励で勤勉な人だといつても間違いではないようだが、しかしその具体の姿は少しもそんな言葉にふさわしくないような気がするのである。刻苦精励しているなどという人ではない。楽しんでいる人の姿である。若い頃でもそんな言葉で表わせるような生活をしているのではない。思い切りやりたいことをやり、目の前のことをやりぬいている、積極的にたたかって来ている人の姿である。受け身でなく能動的である。なる程努力もしたであろう、苦勞もしたであろう。きびしい生活にも耐えたであろう。しかしそれにもかかわらず苦勞をしたのだということだけでは言い表わせないものがある。おそらく職人衆自身に言わせたら「苦勞？ とんでもねえ、あたり前だよ」とでも言うのではないだろうか。

七十、八十の年輩になって、相かわらずコツコツと仕事をして夜なべをする姿も一向に刻苦精励という言葉にふさわしくないのである。仕事が好きで、若いもんには負けねえという気概でやっているのだ。理くつとして

言えば、仕事というものは逃げてはいけない、自分で進んでやれば結構面白いものだななどというけれども、それもそういうフィロソフィーで仕事をしているのではないという気がする。つまり身体がそれを心得ているという状態なのである。全く主体的な仕事の仕方なのである。そういう所までになったのは若い頃からの生活なのである。それを修業というのであろう。修業が主体性を育てたのである。自信をもって眼前のことに出られる性根態度をつくったのは、まさに若い頃からの修業のたまものである。それは主体的だというような言葉だけでは表わせない世界である。

7 職人生活の形成 — 仕事三昧

「朝六時に起きて、だんござか 団子坂上の渡辺銀行の建築現場へ、毎日毎日、降ろうが照ろうが、二時間歩いて通ったのが、仕事はじめだったが」

(大寅道具ばなし、16ページ)

あしかたしらじ これは大工味方寅治さんの十八才の頃の思い出であるが、降っても照っても毎日毎日、二時間歩いて通ったのは、昔のことにしてもやはり、ずいぶん大変であつたろう。しかしこうして仕事というものを中心にした生活のリズムを習慣として身につけていったのであろう。現代のサラリーマン

も、降っても照つても、すし詰電車につめこまれて運ばれて行く。それが習性となっているから、決していやがらない。なれというのは恐ろしいものである。

しかしこの若い頃から仕事中心のリズムになれるということが、職人衆の一生の生活の仕方を規定しているのであろう。このなれをつくる職人修業の特色は、生活、労働、仕事などというものが一つになった生活修業ということであろう。労働は労働、自分の生活はそれとは別などという区別は全くないといつてよい。

「労働法もクソもない時だから、朝は暗いうちから叩き起こされて飯炊きだし、職人が来るまでに砥石の曲りもこすって直しておかなくちやならない。昼の仕事は穴ほりと板削ぐらいなもので、無駄口をきいたり歌でもうたったりしたら大変で、スグ木でも金槌でもとんでくる。

はじめがやかましくつて師匠はもとより『兄弟子とは無理ヘンにゲンコと書く』ってぐらいのもんで、目の隅でチロツとにらまれただけで縮み上つたもんだ。——南国とは言えヒズ、アカギレ、シモヤケのでき放題。ほっだい それやこれやで双の手が象の皮のようにならなきや『この野郎、骨惜しみしやがって』ということになって、いっそう風当たりが強くなるってわけのもんだ。

辛い昼がくれてヤレヤレと手足をのばそうたつてどっこい、そうは問屋がおろさない。昼の仕事で折れたカンナやノミの手入れから風呂炊き掃除、そいつが終れば夜業だ。」

(大工重役大いに語るの森武平さん、続36ページ)

こうして一日の生活がすべて仕事につながっている。現在からみるとまことに無茶だ、人権も何もありませんという姿になっている。しかし人生の仕事というものは本来こういう性質をもっていて、とめどがないということをもこの人たちは会得したのである。大人になったとき、一人前になったとき、そして七十、八十になったとき、それを依然としてやっている。こんどは、自分の好きでやるようになってしまっている。

ここまです仕事で、これからが自分の生活だという考え方もよく考えてみるとおかしいのではない。経済がつくった生活の分裂が人間を不幸にしているのではない。

「職人は銭をとるばかりが能じゃない」と考えるのは、ただ銭についての考え方がそうだというような単純なことでない。能であることが他にあるから言うことなのである。それは言うまでもない「仕事」なのである。銭にならぬ仕事でも好きなのである。

「それでもあたしは仕事は好きでね、小僧と職人が店にはいつも六、七人いたが、ほかのやつは寝かしちまって親方と二人で、十時、十一時すぎても夜なべをしたもんさ。夜が更けてきて膝と背中にチロチロチロチロ、水を注がれるような寒さの中で、だんだん仕事に没頭していった、灯りが冴えてくるのを手元を感じる気分も、ありやアまた悪くねえもんさ。」(157ページ、ぬしや名人・信太郎)

この長谷川信太郎さんの言は、いかにも銭をとるばかりが能じゃないということをよくあらわしていると思われる。

仕事に没頭していった、灯りが冴えて来るのを感じるのも悪くはないという心境は、いかにも、仕事好きである人の言いそうなことである。若い

頃からこういう境地にいたということは、人間としてうらやましいと感じずにはおれない。現代の仕事の感覚とちがうのである。現在は仕事と報酬とが直結しているが、そのことが仕事を好きにさせないのかもしれない。いな報酬を当てにして仕事をさがすから、よい仕事が見つからないのかもしれない。現代はよい仕事をつくり出す雰囲気もなくなっているが、それは仕事というものが人間をつくるものだということが忘れられているからではないだろうか。ただ経済ばかりで考えるから、仕事の方は全く人間を馬鹿にするような仕事にしてしまつて、金さえ払えば人が集つて来ると考える。人々も金さえ入ればというのでそういう所へ集つて行く。こうして人間と仕事の結びつきが全くひからびたものになる。一日八時間という長い時間をそういう心境で人々が生活しているとしたら、人間の心もまた貧しくなるのではない。

仕事をしていて、早くその時間が過ぎればよいと考えているのだったら、その人は不幸である。あわれである。周囲の人々とも心から接することもできない。そういう人には責任の仕事を与えられない。こうして悪循環がおこる。やがてはその人は職場からはみ出していく。現実にはみ出さなくとも実際は脱落している。職場にとつてもよいことでない。企業の仕事に面白くない仕事の寄せ集めで、そう思う人々の集りの場所となつてしまつたら、その企業集団は崩壊するのではない。

職場へゲームを持ちこんだらどうかというような考え方が出て来るのは、こうした崩壊をなんとかして喰い止めようという努力の一つのあらわれであるかもしれない。

「あゝ、このやりかけの仕事かい、これは赤坂の『中川』の女将さ

んからの注文の配膳棚だよ。ゆんべも十一時まで夜なべをした。エ？
年？ ハッハッハッ、あと四年で九十さ。もうダメさ。

けど仕事じゃ若いもんには負けねえよ。今でも昔からのごひいき
の名指しで注文があるから、そいつだけはやるんだ。

十四の年から七十年やって来た仕事だよ。手がきまっちゃってる
から、それほど苦にはならねえのさ。」

(小川才次郎さん、59ページ)

仕事好きで、仕事に自信があつて、仕事を楽しんでいるという心境であ
ろう。九十才近い人がやはり若いものに負けないという自負で仕事を楽し
むのである。それは生きていること、人生を楽しんでいるというより外は
ないであろう。それは心の習性なのであろう。

この人に仕事をするなといえ、きつと悲しむに違いない。立派な職人
だから仕事の注文はあとをたないだろうし、おそらく夜なべをしなければ
ならぬ位、次々と後がつかえているのであろう。それがまたこの人の
自信を増して、精を出して、仕事を楽しんでいるということになるのであ
ろう。

生きていく、人生を本当に過すということとはこういう生き方だとする
と、余暇という問題はどういうことになるのであろう。

仕事と異った人生の楽しみがあつて、それに余暇が注がれている人もあ
ろうが、その人は仕事にはどういう意識をもっているのだらう。仕事も楽
しく、仕事以外にまた一つ楽しみを持つということであらうか。それもよ
いであらう。問題は、どちらにしても、生きている間に持っている時間を、
生き生きと生きていることであらう。いつも生命を投げこんでいるというこ

とならそれは充実した生であらう。

ただ二兎を追う者は一兎だに得ずということがある。人生の仕事という
ものはそういうものらしい。一つのこと集中してはじめて人生の意味、
仕事の意味も面白味もわかる。仕事に責任をもつてはじめて人間もできる
のである。ディレクタントはやはりそれだけのものであつて、そちこち突
つきまわして結局堂に入らないでいる。そういう人は仕事で結局は脱落す
るのである。本当に追究すると、やはり他の方へは心が向かないものであ
ろう。しかしその仕事を核としてあらゆることを位置づけることはできる。
そこに人生の統一、一つの人生が生れるのではないだらうか。その統一の
ない雑多な経験は人間をつくらない。それどころか墮落させる。人間は一
途に生きるべきではないのか。

「明治の四十何年なんて頃の小僧のしつけなんてものは、全くお話
にならねえくらいいきびしいもんでした。

冬の極寒に、仕事がうまくなりますようってんで、深川の不動様
へ裸足で暁の寒参りです。

『早めし、早ぐそ、早あるき』なんてんで、めしを食うんだって、
兄弟子のぶんの給仕をしながら、終るときにやア一緒に終つてない
と、『仕事も出来ないくせに、いつまで大飯食らってやがるんだ！』
とゲンコが飛ぶ始末。』

「こんな具合に仕込まれるんですから、昔は名人がいたもんです。」

(121・122ページ、茂作老瓦談義、新井茂作さん)

新井さんは、高崎在の次男坊に生れたから、「腕に職をつけて自分で食
つていかなくちやならねえ星の下に生れた」という。十四才で高等小学校

を出ると「当時は学問をやると『子孫半バカ』ってえましてね、孫子^{まごこ}までロクなものにやあならねえとされた」時代であつたから、伝手を求めて深川の親方のところへ奉公をしたという人である。こうして小僧生活が始まる。この時から苦しい修業が始まる。

新井さんが昔は名人がいたもんですと言うその一例をあげているが、宮下の勝ちゃんという名人が「おれの葺^ふいた瓦が手でひんぬけたら、わら草履を一足買つてやらア」というので、やつてみたが押しても引いても動かばこそ、とうとうあやまったという。こういう風になるには細心の注意をしている。

「アウンの呼吸でピタリと差す差し方にもあるんですが、上手は敷土の土葺きを夏なら泥を余計に使つてツヤブキするとか、冬なら控えてイスカのハシのように無理にセリモチでふく、とか、下ごしらえまでちゃんと心を配つてあるんです。」

といった具合だという。このような名人の心配り、仕事に打ちこんで最高のものを作り出しているが、それを新井さんは若い頃から目の当りに見せられ、そういう人にやかましく指導されて一人前になつていたのである。「こんな具合に仕込まれたから」よかつたという思いが残っているのである。

「エ？ 屋根の心得を聞かせるってんですか？ さア、『風で飛ばず、雨で漏らず』ってのが屋根の命でしょう。」

という当り前のような仕事に「この道六十年、ちよつと手を抜きや雨が漏り、風でとばされるって仕事に一生をかけて」来た新井さんは、

「ばかみたいないな『屋根を葺く』ってつまらねえような仕事一つにも、

なかなか深い人生の味わいと教訓があるもんでさア。」

と述懐する。職人生活の完成といつてよいではないか。

人生というのは深さで味わうものだというのは意義深い。現代は浅薄な知識で人生をわかろうとする。それが本当の人間を育てない大きな原因ではないか。

「人間棺桶に入ってから^{しめ}勘定してみると、やつぱり好きなことを一生懸命やった方がトクつてことになるのかなア。」（小川才次郎さん、67ページ）

年をとってから、結局のところ、仕事好きが一番トクな人生だったと述懐できるのは、いかにも一生を仕事にうちこんで、その道でおのれを作りあげた人の言うことらしい。

このような心境は、現代の職業として考えられている仕事というものについて多くの人がもっている心境とは違うのではないか。自分と自分の好きな仕事との一体となった生活であつて、それは労働などという概念であらわせないものをもっていると言わねばならない。労働とは報酬というものがついてまわる概念らしい。職人の仕事にも実際にはそれが無いわけではないが、しかし職人衆自身の頭からはそれが抜けてしまつていても言つたらよい。好きなことを一生懸命やったということしか、そこにはない。昇華しているといったらよいだろうか。

このような心境になるのには、やはり相当の苦勞があつたのであらうと思われる。これまで述べて来た修業の厳しさを経て、この心境に達したのであることは間違いない。それはここで私が書いているようなことを、た

だ頭で理解したとか、そういう気持ちになつたらできるなどということではないことは確かである。生活そのもの、毎日の行動そのものが、仕事三昧になつていくということではなくてはならない。いなその仕事三昧という言葉も頭から消えてなくなっているのである。目の前の仕事、物、材料、道具に没入して、そこでうちこんでいるのである。

はっと気がついて見たらそれは仕事三昧であつたのだ。人から聞かれれば、いろいろ言うだろうが、そのことがいつも意識にあるわけではないのである。むしろ何も無いのだ。何もなくてただ一つ生命の純なる働きがあるなどというときざになるが、

「仕事に凝るから道具に凝る、道具に凝るから自分で作る、作った道具で思いのままの仕事をする時の気分の良さなんてモノア、職人だけ知ってる喜びなんですがねえ。」

（村松喜市さん、国会演壇を彫つた人、212ページ）

自分の生命の火を注ぐ仕事がそこにはあるだけなのだ。これは或る意味ではもう仕事でもない。少なくとも現代の感覚での仕事などというものの、職業などというものではないようである。そこにあるのは一つの生活なのである。或いは逆に人生の仕事があるといつてもよいかもしれない。人生そのものである。

8 職人の生甲斐

生甲斐の問題は最近やかましくなっている。一日一日を充実して生きていつているという自覚があることは、人間にとって何よりであることは間違いない。飲んだり食つたり遊んだりの生活も一寸の間は生甲斐を感じさせるかもしれないが、長い人生ではやがて空虚な感におそわれるであろう。恋する男女が恋に酔いしれてしばらくはすべてを忘れても、やがて虚しい思いにおそわれる。長い人生での生甲斐というものは、職人衆の言うようにやはり仕事かもしれない。その生命の火を注ぎこんでおのれをそこにあらわす仕事が人生そのものであるのかもしれない。無常の人生を感じずるとき、特にそう思われる。物にとらわれ、金銭を追いまわし、名誉欲に振り廻される人生は、いつか空しいものとなるのではないか。

「父は『甲州谷村の源さん』という名で人に知られた男で、マア、建具の組子では『名人』ということになっていました。（中略）『おやじー』というときすぐ思い出す姿があるんですが、あれは終戦の翌年でした。赤羽の先の鳩ガ谷という所にいる兄の家で、病気が重くなつてもう駄目だと言われたというので、見に行つたんです。庭からなんの気なしに入つて行きますとね、病み衰えて痩せて軽くなつちまつたおやじがね、丹前を着て、というより、つくねた丹前の中

に落ち込んだようにチマチマツと見える衰れた姿で、陽のいっぱい当たっている廊下に道具を並べて、ノミ、毛引きカンナ、胴づきと、一つ一つ手に取り、眺め、打ち返し、また吸いこまれるように眺め入っている姿が目に入っただけです。ゾーと全身粟立ちましたね。かけようとした声をアツツと飲みこまされて、棒立ちのまんましばらくその姿を眺めておりました。

父は柔道の三船久蔵さんに似ていましたね、五尺に足りない小男の、痩せぎす細面ですが、目は鋭くてちよつと冗談なんか言いかけにくいような感のある男でした。それが見るかげもない幽鬼のように痩せさらばえ、老いさらばえ、病みほうけながら、なお道具に見入っている執着は、見事というよりは不気味でした。(中略)『おれも人をゾーッとさせるような男になりたい』と思ったんですが、未だにそんな人間には成れずに五十の坂を二つも越えてしまいました。」(二代目源さん組子斬、佐藤重雄さん、351ページ)

これは職人が、仕事に何もかもかけて、そこに生甲斐をもっているという姿であろう。なんでもよいし、仕事でも、仕事以外でもこういう“うちこみ方”があるということは、人間として羨ましいことである。しかしそうなる、ここまで打ち込むことはどうして可能なのかということになるが、それはもう若い頃からの生活の積みあげで、打ち込みつづけて来たことの結果ということだと言うほかはない。若い頃は打ち込むといつても、やはりどこかで気が抜けている。打ち込むというのは眼前のことに積極的に出ている。心がそこへ集中しているということであろうが、そういうことも修業が足りない間は、やはり密度は希薄なのであろう。修業と共に、

心があらゆる面で、あらゆる角度から働いて濃い密度になる。そうして生活全体が、谷村の源さんのようになる。病み衰えても心は目前の対象に十分に働きかける。そこで十分に生きている。それは修業の年輪のなせるわざであらう。

近代の学校教育は、こういう一つのことを打ちこむ性格態度というものを形成するという目標を、すっかり見失ってしまった。反対にうちこまないで、知識として持つ、わかるということを目標とした。さまざまな知識を平板な紙の上に羅列してわからせようとした。その結果はわかったふりをする人間を作ることになった。所詮うちこまないで、本当にわかることなどはありはしないのだ。

学校の知識教育は結局はわかったふりをするることなのである。もちろんそれをふりすることだと自覚しているわけでない。本当にわかっていふことについての体験がない。つまりうちこんで行動する場に置かれることがない。だから本当にわかるということがどういうことかわからない。今自分の知っていることそれが本当にわかっていふことだと錯覚している。これは人間にとって不幸なことである。こうして軽薄才子の横行する歪んだ社会が現出するのである。

現代は仕事に生甲斐を感じさせるものがなくなっているといわれる。確かにその通りであるが、これもわれわれ現代人の思想がつくり出したものである。

職業とか労働とかを人間の人生の仕事の場としてでなく、金銭を稼ぐ場

としてしまったのは、やはりわれわれであると反省すべきではないか。いつの時代でも人間は現世の垢^{あか}にまみれて無意味な人生を送ることを余儀なくされる運命にある。しかしまたその中で人生を大切にし人生の仕事をして人間としての価値ある仕事をして来た人々も多い。今紹介している職人衆はみなそういう人達である。しかしその人達が、そういう人生の仕事をも十分に果して来たのは、一般の人々の生き方とは違った生き方をして来たからである。普通に企業に入って金銭を稼ぐ形でいわゆる労働をしているのでは、人生の仕事として意味ある仕事を発見し得なかったであろうし、それでは人々を喜ばせる名作も生み出せなかったであろう。そしてその人自身も生きて甲斐ある人生だったと感じなかった、人々の心にひびく人生を送れなかったと考えられる。

労働の世界を人間のこうした人間的な能力を十分に発揮させる場として作ろうとしないのは何故だろうか。それにはやはり現代の企業、その経済成長主義が大きな力を持って人間を圧迫していることを反省しないわけにはいくまい。経済はその企業集団の人々を養って行くために必要なものであることは当然であるが、そのためにその集団の人々の人間を圧迫するような形であってはいけないであろう。経済第一主義になると、その辺が忘れられてしまう。

誰も知っているように、現代産業の生産第一のシステムは、人間を機械部品のように扱って、単調労働を人間に強いる。そのことにより生産をあげ、経済成長をとげ、企業集団内の人々の生活を保証する。人々はそれによって人間としての生活を保持できるという錯覚をもった。錯覚でない場合もあったであろうが、システムは益々人間をケージ飼育の鶏のようにし

てしまった。新しい奴隷の誕生である。経済第一という考え方がこの方向をどんどん押し進めている。この点は企業の経済的責任をもつものは考え直さなくてはならぬことである。

最近の一般の動向でも、企業集団の中の歯車の一こまとなっている人々は、仕事に生甲斐つまり人間としての生命力を燃焼させようとする意欲を失っている。反対に企業全体を統轄する立場に立つ人々は生甲斐を感じている。一将功なつて万骨枯るではないか。人々に生甲斐を感じさせる仕事の間をつくり出すというのは企業の責任ある人々の基本的な態度でなくてはならぬのではないか。

しかしこのことのもっと根本的な原因は、より深い所にある。人々の思想、心の問題がある。もちろんそれは社会の客観的状态とのダイナミックな関係にあるのであるが、人間の心の側からも追究してみる必要がある。現代の人間は、若い頃からの教育のされ方からして、仕事の中に人生を見つける教育はされていない。学ぶという最も人生の基本的なことさえもが、テストのためであり、成績という他人との比較であり、入学試験という競争のためである。おのれの人生の充実ということ自体ではなくなっているというのが現実である。それは社会全体がそういう方向にあるからということでもあるが、同時に人間としての生き方もそうになっている。

厳しい言い方をすれば、より有利な暮らし方、しかもそれは極めて目先の、金銭的なことにのみ人々は目をつけて生きているという一般的な雰囲気があるということを考えてみなければならぬ。しかしそのことの自覚がなければ、人々の人生の充実、生甲斐を感じる生活というものを探究す

る緒はつかめないということになるであろう。

何度も出て来る味方寅治さんだが、若い頃から道具にこり出して、道具道楽となっている。そうして、明けても暮れても道具ということになる。

「だから一日、十五日の休みは道具こしらえて終っちまった。とぐものはとぐ、油ひくものはひく、だけどひとわたりやれば軽く一日かかっちゃうんだ。

刃はついていてきれいなんだが、砥石にかける、油をつける、風を入れると一日しか持たないのが刃物だから丁寧に包む。これで一日たっちゃう。酒・女・バクチ、そんなヒマもゼニもありやしねえ。活動写真だって見たことねえや。」

この人には、現在一般に言われる余暇なんてものはなかったと言ってよかろう。といってこの人に関する限りは、余暇は必要なかったといってよい。道具いじくりを楽しんでいるこういう人生を当世風な考え方で見ると、こういうことになるのだろうか。折角この世に生れて、人生を楽しまないでという人もいるかも知れない。しかし味方さんは道具で楽しんでいるのである。そして、また同時に仕事でも楽しんでいる。楽しみというのは、人間からはなれて外にあるものが楽しいという形であるものではないのである。

このことをもつとつきつめていうと、この人々は昔の尺度で、余暇はあったのである。その余暇をどう過したかという、道具いじくりで過したということである。余暇というものの中味が、この人の場合は、こういう形で仕事に結びついていた。だからこの人は生活の背景となるものが一本あって、それで全体ができていたということであろう。

最近余暇開発などという妙な言葉がはやっている。本来、人生というものから見たら、労働だ、余暇だというのは単なる形式的な区別にすぎない。一つの意義ある人生があることが大切なのである。ところが、労働が人間に人生の意義を感じさせないものにしてしまっている。それは労働の場をつくっている社会の非人間的な悪い一面なのである。近代産業について言うなら、人間を単細胞的な馬鹿扱いにして仕事のシステムをつくり、その中へ人間をほうりこんで、労働をさせている。その中で人間は全く機械的な仕事をやらせられる。非人間的な扱いの場に強制されて置かれる。それは生きることのためである。動物的な生命をまず維持するためである。しかし、その上に人間として生きることを考えようとする。そこに労働以外の時間を人間的な生活の充実ということに向けようとする。余暇の時間にこそ生甲斐を求めようとする。こうして余暇開発などという妙なものが生れたのであろう。

しかし余暇開発も結構であるが、それと同時に、そして人生の意義から言えばそれ以前に、労働を人間的な生命の充実の場とする開発が行なわれなければならぬのである。労働を現在のような非人間的なものにしておいて、余暇開発などということを言うのは本当はナンセンスなのである。

しかしまたある点からすると、そのようなことが問題になっているのも人間の進歩かもしれない。昔は奴隷があった。それを当然のこととして、己の欲せざることを他人に課していた。もつとも奴隷の方が人生の意義から言って意味のある生活をしていたということもあるかもしれない。人生の意義の充実というのは、必ずしも世間的な意味での金のあること、権力のあることとは関係があるわけではない。金銭や権力に結びついているこ

とが、人生を十分に生きていることではない。人生を十分に生きるというのは、それとは全く次元の違う世界のことである。

現代は現代的な奴隷を生み出しているとも言える。企業のシステムの中でケージ飼育の鶏のような生活を強いられるのは、名前は異なっても明らかに奴隷であろう。これを人間的な生活をさせる為に余暇で補うことは本末を誤っている。本質はまず仕事を、労働のシステムを人間的なものにすることである。そういう努力こそ現代人の責任である。現代人すべてが自らの努力によって、人間的な仕事をつくり出すことをしなくてはならぬ。そうでなくして余暇に逃避をするようなことを一人一人が考えているなら、自分で自分を奴隷の境涯に投げこんで行くことになる。自分の大切な時間に自分の生甲斐を投入できないで労働をすることになる。労働をそのようにおくことが、また自分の労働をますます無意味なものにする。たとえ一週間三十時間の労働であっても、それは人生の浪費である。

職場というものが人生を浪費する時間であろうか。人と人との交りが、そういう浪費の場として捨てられた人生の一コマの中で成り立つというのは悲惨ではないか。そういう考え方の人間に時としてわれわれは逢うことがある。いかにも情けないという気がする。それは情なく感ずるばかりでなく、他人の人生に害を与えることが多い。つまり職場で真に人間としてぶつかり合うことをしないのである。そういう人々の集りの職場は、結局は人間の集団としての体をなさなくなる。このことは拡大して言えば現代社会が職場をつくり直さなければ、現代社会が崩壊するかも知れないということである。職場が非人間的な社会集団であることに目をそむけて、余暇開発などということの問題にしているのは、本質的な人間の救済になら

ないのである。

9 心の豊かさ — 核のある生活

職人衆の生活は、いわば仕事の三昧の生活といってもよい。それがはじめにもいったように、当世風ではないのである。しかしそのことの本質的な意味は、仕事というものについての職人の結びつき方が異なっていることにあるのである。近代的な意味での人に買われる労働ではないのである。自分の生活を打ち込むような仕事なのである。これが生甲斐にもつながり、余暇無用にもつながるのである。このことは職人だから成立つのであろうか。そうではあるまい。生甲斐をもつほどの人々は、みな全生活を打ちこんでいる。そして不義なことに、余暇のない人が多いのである。といってそれは、仕事に閉ざされた狭い世界に住んでいることになるのであろうか。否それは反対である。広く豊かな心というのは、深く一筋に打ちこむことの中から生れるものであるうか。

前にあげた腕のヒジが変型したという名人畳屋、田村さんの述懐であるが、
「昔の畳屋は、茶室だつてなんだつてやらされるんだから、ひと通りの職人はみんな茶の湯生け花の作法ぐらひは心得ていたもんだ。」

(101ページ)

というのである。つまり狭い意味の腕ばかりでなく、現代的に言えば広い教養も積んでいたのである。そこまで広く心を修練しなくては一人前の職人になれなかった。

現代の感覚では、お茶お花はいわば教養であり、飾り的なものかもしれないが、職人にはそれが仕事に生きている、位置づいている。

次の話も同じような例であるが、造園の名人飯田十基^{じゅうき}さんは、

「私の師匠の松本幾多郎なんて人は、これは飛鳥山の渋沢栄一さんの庭を作ったんですが、『ああ、松本が来てるんなら、お茶会はまごつかないね』と渋沢さんに言われた人です。」（144ページ）

と師匠の人間像を語っている。こういう人の生活は、単なるピースワーカーとしての職人生活ではない。いな職人の本物というのはこれだけ広いものをもっているべきなのであろう。こういう人の生活をみると、仕事以外の所に楽しみを求めているのではない。仕事自体が大変広い裾野をもっているのである。現代人が余暇で求めるものも自分の仕事の中に持っているといつてよい。ここには余暇というものについて深く考えなければならぬことがある。ただ時間で区切る仕事以外が余暇であるのではなく、仕事を核とする生活の一部として余暇の生活も位置づいている。ということは核のある生活があつて余暇の営みもまた人間の心の豊さにつながる。さもないと、余暇は人生を分裂させる営みになりかねない。

石勝の名で有名な中村勝五郎さんの修業の中には、石を切る修業はもちろんだが、そのほかに習字のようなことまでが入っている。

「第一、その土台になる書を習わなければ、というので私も一流の

書家にお習字に通わされました。」（135ページ）

よい人生の仕事というものは、やはり広い裾野^{すその}をもつのである。そういう仕事でない単調な労働を人間に強いるのはよくないのではないか。人は自分でもそういう仕事を選んで生きる覚悟が必要なのであろう。そのことが社会的にも、あらゆる仕事を人生的に意味のある仕事に切りかえるためのエネルギーともなるのである。中村勝五郎さんは、自分で創造的技術を切り開いていった職人衆なのであるが、そういう人は自分の人生のあらゆる経験を仕事に生かしている。仕事が経験をよぶ。

「私は思うんですが、石ほど高くて安いものは無いんじゃないでしょうか。（中略）こうして何人もの職人の目と手を通り、年季の入った腕の手塩にかけられると、石に命が入ってくるんですね。石が生きるんです。（中略）私は庭石、灯籠、彫刻はもとよりですが、記念碑や忠霊塔、境界塔を含めて、北は樺太から南は南洋、はては外国まで自分の店の仕事がおし立てられ、これから何百年も立ち続けていくのだと思うとこわくなることがあります。」

頭の碁盤の中に布石されたこれらの仕事は、いろいろなその時代を思い出させてくれました、こうして病気で寝ていまして、その碑の一本一本を頭の中で訪ねて歩けば退屈する所じやありません。『夢は世界を駆けめぐる』ですよ、ハハハ・・・」（139ページ）という人生と仕事とが永遠の相において結びついた生き方が語られている。中村さんは、日本の石屋職人の技術は「世界に自慢してもいいと思います」と言う。「直接外国へ参って向うの技術を見て来たから」よくわかるが「一

言で言えば外国の石屋は機械の設備は良いんですが、そのためにかえって技術はダメですね」という自信をもっている。戦争中には石の条盤ふらいすまでつくったという。そして千分の二まで平らにできる性能を持たしたという。そういう人生の仕事が、この人の人生観をつくり、豊かな生活思想をつくっていることができるという。仕事は人生をつくるというように言ってもよいであろう。広い世界も見ている。決して単調な視野の狭い人生ではない。しかも仕事一筋に生きている。このことの意味するものをわれわれは思い知らなくてはならぬのではないか。仕事という核があつて、広い教養（あまりいい言葉でないが）が生きて、一つの生活をつくっている。分裂した飾りものの教養ではない。

むずかしい塗装技術の簡易化を研究して自腹で講習会を走りまわっている磯崎祐三さんは、学校は昔の尋常三年しか行っていない人であるが、「建築塗装技術研究所」を作つて「若い人達に技術を覚えて貰うのをたつた一つの道楽にしてるんです」と語るのである。（171ページ）

その仕事を始めたのにはわけがある。日本塗装工業会から『標準建築塗装』というものが出たが、これは立派な内容のものだが、「字では書いてあるが見本がついてない。職人の仕事は本だけじゃア本当には分らない。よしおれが見本を作つてやろうつてんで、一年がかりでこさえました。」そして夜中に目をさまして寢床の中で仰向けになつたまま、仕事の手順を上から下まで順序よく喋れるように頭の中で繰返して、これならよしと講習会を引受けるという熱の入れ方である。そして、

「やり方を簡単にしてのみこませたら、あとはその人達の勉強と

楽しみーねえ、一生をかけた仕事の面白味つてものは、またそこにあるんじゃないませんかねえ。」（175ページ）
というわけである。

「おれが恩を蒙つた職人衆へのお返しは、むずかしい仕事を工夫して、やさしく誰にでも簡単に出来るやり方を編み出して、それを隠さず残らず広く伝えることだ。そうでなくちゃア今日様に済まねえ。だからこの道楽は大目に見てくれつて話してるんです。ナア婆さんや。」（180ページ）

こういう心は、大変豊かな心とでも言うしか外に言い様がない。立派な道楽である。しかし仕事に生きる人間の道楽なのである。この人も自分の生活のすべての経験を仕事に生かして独創的な仕事をしている。さまざまな経験を生かすのは仕事という核があるからである。核がなければ経験は消え去つて行く。そこに豊かさは生れない。

椅子張りの名人藤代重さんの話はまた面白く、深いものがある。椅子張りなんてものは、工程は至極簡単だが、しかしそこにむつかしさがあるという。

「けれどもどうしてどうして、椅子張りの命は、『掛け具合の良さ』つていう、分つたような分らない様な微妙な所にあるんです。

どこがどうとは言えないけれども、腕の良い職人が心をこめて張つた椅子というものは、第一に、それぞれの形に応じた弾力性があるつて、張り上りの線が美しい。そしてその接触感というものは奥深くつてデリケートです。」

こうなつて来ると、これはただ単に手が動くというような簡単なことで

ない。目もあれば身体全体で腰掛けてみて、掛け心地を感覚する神経というものが育って来なくてはならない。だから藤代さんは言う。

「あたくしも二十七才でこの田村町に店を持つてからでも三十五年毎日毎日が研究と勉強でした。」(333ページ)

ということになるのである。いわば全身と全心が育たなくてはならぬのであろう。

次の話は造園の名人飯田さんの話である。

「名人というものはあゝいう人をいうんでしょうが、自分では手を下さない。座敷にすわってて、もうあれが終った時分だからこれをやれ、つてな具合に指図をするだけです、それがピタリ。人の使いがうまいし、指図が適切、——もともと当時は良い職人もいました。」(144ページ)

というようなことになると、何か八方にらみの神経が作られているといったらよいであろうか。俗に眼光紙背に徹すなどという言葉があるが、そういう眼光が、仕事全体に及んでいるというのであろうか。

「職人つてものは、手が利くだけじゃアいけねえや。目も利かなくつちやア一人前とは言われねえ。あたしは酒もタバコもやらないが、お出入り先でいい品を見せて頂くのをタッタ一つの道楽にして来たことが、きつとどこかで役に立っているんだろう。」(66ページ)

これは指物師小川才次郎さんの言葉である。このような目が利くということになるには、なかなか複雑な過程が必要なのではないだろうか。手によつて作り、作ったものを眺め、それを数多くこなして、いろいろ比べる

ということを通じて、次第に目が利くという段階になるのであろう。時間もかかるし、努力もいるのである。始めは、目があつてもふし穴であり、何も見えない。それが次第に見えて来る。同じものを見て、見る事が異なつて来る。その見ることは、自分の作る腕と極めて深い関係がある。こうして洗練された目が出来上がって来る。その目の成長は仕事という核があるからである。

こういう状態になると、ある意味でその人の人生は、よき循環の世界に入る。腕がよいものを作り、それがまた目を向上させ、それがまた腕を上げるものとなるといった具合である。たとえば、表具師の中村豊さんの話である

「あれは確か、景年作けいねんの赤味の勝った『秋景』でしたが、長すぎて床に掛けられないから切り詰めてくれ、という注文で来たものでした。見ると、幅七尺五寸、横二尺五寸の大和表装でしたが、仕上げが実に見事で、ケバ一つないし、軸を巻いた小口なんかは、名刀でスパリ裁ち落したように鮮やかなんです。ひと目見た途端震いについて頬つぺたをおつつきたいほどの見事さなんです——」

(283ページ、鶴心堂表具ばなし)

こうして結局中村さんは京都に修業に行くことになるのだが、これはもう一流の目が出来上っていたのであろう。一目ですばらしさを感じとる、それが更に腕をみがく、向上心をかき立てる。こうして名人へと近づく道を歩きつづけるのである。

この中村さんの心境は最近になると次のようになっていく。

「良い仕事というものは心にしみて良いもので、森さん(森白兔さ

ん―著者注）の裂地を見ていると、こちらもヨシ、という気になつて仕事の張り合いが出てくるんです。こういう方がだんだん少なくなるのは淋しいですね。」（292ページ）

それからまた次のように言う。名人は名人を知り、そうなるとう現代風の経済の尺度を超越してしまうのである。

「はい、もちろん幾ら幾らのものなどというご注文はしませんし、幾らですかとも聞きません。良い仕事は高いのが当然で、その品物にひき合つたお値段をお支払いして、それを手にとつて眺める時の良い気分というものはございません。」（292ページ）

豊かな人生などというものは、こういう人生なのであろうか。これは金であがなえる人生ではないことは確かである。自分の持つている目と、手と、身体、心でのみしか得られない人生というではないか。

こういう目は、もうただ作品を見つというふうな目ではない。ただものを見ているのではなく、その作品を作つた人の心を見つてと言つた方が良いでしょう。中村さんは、森さんのことを「仕事が実に正直で、その草木染は絶品です」（291ページ）などと言つていますが、もう作品を見るというより、仕事が正直だなどという、つまり人を見つていのである。

心の豊かさというのは、最後には人の心を感じ得る能力のことを言うのではない。表具から額装へと進んだ岡村辰雄さんの述懐は、そういう心境を次のように語つてゐる。それは梅原竜三郎氏が終戦間もなくの頃、大仁で富士を描いている頃、たまたま感得したものである。

「あたしが隣室で寝ておりますと、日の出の直前の、一月初めの

ひやひやと冷たい中で、隣りの先生のお部屋ではもう筆洗にあてたバケツに張つた氷をこわして仕事にかゝつていらつしやる物音がするんです。―あたくしは、あの暁の氷を割つて仕事をお始めになる物音が耳に残つて、自分の仕事をする時にもどんなに良い教訓になつてゐるか分りません。

仕事つてものは意志でのしかゝるような氣力のいるものですから、額装の意匠に悩んで行き詰り、投げ出したくなる時なんかは、あの梅原先生がパリパリと氷を割つて仕事をお始めになつた時の、鋭い、意欲的な音を耳に思い起して、勇気を奮い立てるんです。」

（295ページ、多聞堂四代）

こういう所まで来ると、一種の象徴の世界ではないか。氷を割る音が人間の意欲をかりたててゐるのである。

こういう話は、鶴心堂中村豊さんにもある。中村さんの家の玄関の鶴心堂という木彫りの扁額は、横山大観氏の書いたものであるのだが、二年も待つて、やつと出来上つた。それを取りに行くと、あの名筆の先生が、丁寧に十数枚の稽古をしているのが分つて深く感動したというのである。その時の感動を、

「酒仙―といひますか、まるで物にこだわらない仙人みたいに磊落に見える先生が、実はこうして十数枚を下書きをしていらつしやるんだなアと思いましたら、『仕事』についての心構えを無言で教えて頂いたような氣がしましてねえ・・・。」（282ページ）

と述懐している。やはり人を感じてゐるのである。

一芸に秀でるものは百芸にも秀でるという言葉があるが、人間を見抜き、

そこにあらわされたものの本質を見抜く力ができるとあらゆるものに通ずる。豊かな心が、世界の豊かさを見せてくれるのである。この人々にとつては、すべてが仕事につながっているが、また一面すべてが心を養う豊かな世界であるのだろう。余暇もまた仕事であり、仕事の中に余暇があるのであろう。

10 無限の前進―文化を生む心

仕事の世界というのは、無限の前進の世界である。

「けれどもこの道は、やればやる程奥も深く広くもなつて参りますので、うかうか年もとつておれません。」

(291ページ、鶴心堂表具ばなし)

これは中村鶴心堂さんの述懐であるが、この境地に達することは、なかなか一足とびには行くまい。生兵法では却つて奥を極めたつもりになることが多いのであつて、奥が極められぬことを悟ることが、人間の出来上り方が深いということではないだろうか。

「ふつうの『干網』でも組めれば日本中を大威張りで西行出来る」とされていたんですが、突込んでみれば、先には先があるもんで

す。」(359ページ、二代目源さん組子噺)

これは飾り障子の名人佐藤重雄さんの述懐である。やればやる程奥が深いというのは、仕事というものが、単に客体としてのものではないということであらう。こちらが伸びれば、仕事の方もより深い姿を表わしてくるのであろう。これだけやればよしというきまつたものとして仕事と考えられているのではない。こちらの心が伸びれば、つくりあげる目標もより高く、材料もまたそれに応じて新たなものとして人間に迫つて来るのであろう。つまり奥深いことを感じていること自体、仕事に生きていることである。次々へと仕事にいとむことが、仕事の奥深さを感じさせるのである。それは言い換えれば人間の能力の無限さである。無限におのれの力を発揮しようとする人間の心の反映である。

この道は奥深いなどという言い方は、きわめて象徴的である。それは日常的に言うとうとうとうことであらうか。目の前の仕事に真剣にとりくむように心が出来ているのであろう。

「職人てものはふしぎなもので『こいつ出来ません』つてことが言いたくない。何とか工夫したり勉強したりして、新しい材料もこなしてみたい。」

だからこの頃のように、次ぎ次ぎ新しい材料が出てくると、のんびり年をとつてるヒマありませんや。」

(茂作老瓦談義、125ページ)

これは屋根屋の新井茂作さんの述懐であるが、次から次へと仕事が生れるのである。いな自分が生み出すのである。目の前に課題があらわれる。いな自分が周囲から見つけ出すのである。

「新しいものは、むちかしいけれど、やってみるとおもしろいね。三つ折り寝椅子、安楽椅子、菊型椅子、三点セット、スツール、マガジン・ラック、どんどん新しくなっていくから、ボクの腕もどんどん新しくしていかなくっちゃ。」

(318ページ、台湾ホネ屋、陳乞朋)

これは若くして日本へ来て以来五十年にわたる籐竹製造職人の述懐である。誰によらず無限に前進するのである。自分で前進を生み出すのである。

目前のことに具体的に出る心がある、そういうように動く心が出来上がっているということなのであろう。それはあるいは生物というものの本質かもしれない。生物の進化とはそういうものではないだろうか。生命はおのれの環境に適合するように、おのれをつくりかえて来たというが、それは時々刻々自分の周囲をうけとり、反応していくという絶えざるいとなみの中から出来上って来たのであろう。

人間は長い歴史の中でさまざまな環境で、さまざまな文明をつくり、それがまた消え去って、新しい文明に変わっていく。しかしそれらの文明の根底には、人間が環境に働きかけ、仕事によって生命の力を実現する文化への心が動いているのではないか。

次の述懐は岡村多聞堂さんのものである。

『『終った仕事はタレタクソ』っていうビローな諺がありますけど、あたくしはこれの信奉者です。前へ、前へ。』

(297ページ、多聞堂四代)

仕事をし終わせたからこちらが伸びたのだ。こういう言葉は名人職人衆

がどういう心掛けで自分の仕事を見ているかをあらわしている。自分のやった仕事に満足していない。それを仕上げたので次にやりたいことが生れて来た、見えて来たのである。岡村さんはこうも言っている。

「仕事をしていると頭も使うし体も使うから年をとらないんですね。

(中略) あたくしもうんと良い仕事をしてうんと長生きしたいものだと思っています。日本にはまだ確たる額装スタイルというものが打ち樹てられてはいないんだから、何でも勉強して自分のものにし、次にはそいつを否定してまた前に進むーそうありたいと思ってるんです。」(297ページ)

前へ前へと進む岡村さんは、うしろを見ることもまた深い。もう数年も前であるが、エジプト展があつた時の感想であらう。次のように言っている。

「今度の『エジプト展』を見て、あたくしは進化論を疑いたくなりましたね。人間は猿から進化したんだそうですが、五千年も前にこんなすばらしいレリーフを作ってるんだからなァと、しばらくその前を動かせませんでしたよ。」

「五千年は昔すぎますから、千二百年前の本朝奈良時代をふりかえってみても、まことに大変な時代ですよ。(中略) あのと正倉院の御物の保存法は、カンペキと言って良いんじゃないでしょうか。(中略)

ー御物の衣類なんかの納まっている唐櫃は、タププリ間隔を置いて並べられ、中はと言うと、これまた大きな容れ物に僅ウかししか入れてない。」

「しかも毎年十一月の一日から五日までの好天を選んで必ず曝涼ばくりょうをやることに昔っからきまつていて、さらして風を通す。日本では、

この季節が虫干しには一番良い季節なので、絵画でもいっぺん虫干しすれば、大丈夫一年はもつんです。ところが今の人は殆んどこの虫干しをなさらないし、物の蔵しまい方も忘れてしまっている。―(中略)

例えば、あの絵画を入れる桐箱ですがね。昔の経師屋や美術商は、緊急の火事なんぞの時には、絵画は桐箱に納めて井戸に投げ込んで逃げたもんです。四日や五日、井戸に沈めたって印籠作りの桐箱は水を通しませんし、それに万一焔に表をなめられてまっ黒に焦げたって、中身の絵画はピリッともしていません。(中略) 虫干し一つ、蔵い方一つでも、千年前の人はよく考えているんですから、いろいろ学ばなくちゃいけません。―(297・299ページ)

「足利時代というのは、『床の間』が、『仏座』『貴人の座』から『美術鑑賞の座』に完成した時です。

左右に壁を取って横明りを防ぎ、斜めの自然光線で適当な高さと深さを持ち、これに花を添え香を焚いて絵画を鑑賞する場所を作ったんですから、嗅覚まで動員しての美術鑑賞の演出―、イヤ見事なもんですよ。―(300ページ)

こういう人類の歴史、古い時代の人々の立派な仕事を十二分に理解する深い心を、岡本さんは身につけてしまった。自然と人間との調和した世界を、古今東西にわたって、自らの目で発見していくすばらしい心をもっている。こういう人がどんな心で仕事をするか。

「ところが近来、特に戦後は建築がガラリと大きく変わって、いわば

アメリカ式のシャープさが大いに取り入れられるようになりました。」

「新しい建築にマッチした更に新しい額装が創られなければならない。あたくしはそう思っただけで去年の暮あたりから、また新しい試みを始めています。―(300-301ページ)

こういう無限に前進する心が、本当に人間の文化(物質的な文明ではない)を生み出す心というものであろう。

仕事とは、このように見て来ると人類の進歩の踏み台なのである。仕事によって人間は伸びて行くのである。言いかえれば人間は成長するために、何か自分の仕事にまっしぐらに突込まなくてはならない。そこでおのれの生命をかけなくてはならぬのではないか。そういうものがないところに人間としての成長はないといってよい。

こういう仕事で、どこでもいつでも出来るように、社会の人々の力が向けられなくてはならぬのではないか。人に仕事をさせる企業の経営者の責任はまさにそこにあるのである。

人間は働くことを通じて、つまり仕事を通じておのれの生命の焔を燃やしつづける。誰もがそうであろう。それを大事にすることが、人間を大切にすることであろう。

われわれは生きて行くということがあるから、経済ということを考えなければならぬことは確かである。特に近代の社会は人々が分業によって生きて行く社会となったから、経済もポリティカル・エコノミーという次元で処理されなければならなくなった。決して私経済ではなく公経済なのである。

しかし、公経済も、基本は人間を大切に作る経済でなければならぬことは、論をまたぬであろう。経済のたて前が、経済のために人間を機械部品にし、疎外するようなことがあつてはならぬことも言うまでもない。この原則は誰もが反対しない所であろうが、しかし現実のこと、具体の場ではそうはならない。われわれはとかく、人間であり、お互いに人間として生きて行くことに協業することが大切だということを忘れ勝ちである。深く戒心すべき事ではないか。

職人衆は当世風でない仕事の仕方で、今は世の中の日の当らぬ所に居るかもしれない。しかしそこには、人類という生物が、その生物としてのあり方を真実につきつめている姿を見せてくれている。そして現代の社会がそれを忘れているから、日が当たらない。忘れている社会が間違っているのである。もう一度社会は、物質万能、経済万能から人間の仕事に人間の生活に、立ちかえらなくてはならぬのではないか。それは社会の人々のすべてによって努力されなくてはならぬ。気の付く人からその努力がなされねばならない。

わけでも教育者は、そのことにこそ自分の仕事を発見すべきではないだろうか。それが教育にたずさわる者の人間的仕事の実現の道であろう。この道は必ずしも平担ではない。しかしその営みは、永遠につづけられねばならぬのである。

「工芸でもなんでも、物は一代なんて気短かな物指しじゃ計れない。良いものを作るにはどうしても二代三代かかるようだねえ。」

(235ページ、ギヤマンの虹を大衆へ)

これは岩田ガラスの岩田藤七さんの述懐である。

「ええ？ 親子四代？ そうです。権勢の座は変転しますが、権力に関係なく町の片隅で手作りでやっている名前も入れない手仕事というものは、連綿とシブトク続いて決して亡びるもんじゃありませんよ。」(306ページ、多門堂四代)

これは岡村辰雄さんの述懐である。こうして人類の仕事はつづいて行くということであろう。その道を歩く者のみが、道を知っていると言えないだろうか。その生命の営みが、人の心に何かを残していく。そして人類は生きつづけて行く。次々と新たな文化が生れて行く。その生の営みへの個体の参加が、それが人の生きたあかしなのであろう。